新後撰和歌集

新後撰和歌集巻第一

春歌上

年の内に春立ける日よみ侍ける

前大納言為氏

さほ姫の霞のころもふゆかけて雪けの空に春はきにけり

道助法親王の家に五十首歌よみ侍けるに初春の心を

常磐井入道前太政大臣

冬の雪はしはしもわかえつゝの空に立て春やくる霞

題しらす

後一條入道前関白左大臣

春とへと山さえにけりてなかくのあまのかはらの月のかすみて

従二位家隆

きのふまてふりつむ雪のみよし野の山もちかくに霞む春かな

久安六年崇徳院に百首歌たてまつりける時

藤原清輔朝臣

いつしかとかすまさるとも音羽山ゆきしつまりや春をきつゝ

宝治二年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時

山霞

弁内侍

あけゆくの山辺も春と見えて霧やかすみの立のほるらん

春風吹氷一時来といふ事をよませ給ける

土御門院御製

竹のねにあらしも浪もいりあひのかねのおとさへ春をしるらし

名所百首哥よませ給ける時

正三位知家

さらでだに見田の浪に声あはせけさ春や立らん

初春の心を

院御製

春やとき霞やおそきたちかへり猶冬かれの峯の白雪

春の哥の中に

前中納言定家

春やとき谷の鶯うちはふきまたふる雪のふるすいつらん

久安百首哥よませ給ける時

左京大夫顕輔

うちなひき春くるけふの鶯の声きくにそ里は

百首哥よませ給ける時鶯

後鳥羽院御製

春くれは滝のいともし春日山きえあへぬ雪に鶯そなく

道助法親王の家にて五十首哥の中に雪中鶯

藤原信実朝臣

雪さえのねぶしに梅に鶯の木づたひちらす春の雪

建長六年三首哥合に鶯

山階入道左大臣

浅みどり霞の梢めしもかくれぬ鶯のこゑ

山家鶯といふ事を　源頼朝卿

鶯のきこゆるかたをしるへにて山里にみえこし春の日をくらさ

鶯をよみ侍ける　寂蓮法師

宿ちかき河のさ柳に風ふけは花まつ程の鶯の声

弘長元年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時

春雪　前大納言為家

風さける花とやいはんうちはらふ袖にたまらぬのへの春のあは雪

題しらす　今上天皇

春くれは雪こそみゆれ山かけの梢をしらぬ花の散ける

式乾門院御匣

高砂の尾上のかすみ立そひて程なくきゆる松の上の雪

従二位家隆

天原そらもひかりの風のなほさえて霞もこほる春のよの月

餘寒の心を　光明峯寺入道前摂政左大臣

山河に冬のしからみかけとめてしのくにしかる春かな

春の歌の中に　後京極摂政前太政大臣

鶯の声もしはしうちとけて山里の雪まの草も春めきにけり

百首歌よみ侍ける時

入道前太政大臣

今よりはふゆの川にこほりつゝ宇多の里のみそらの末に雪は降つゝ

雪中若菜といふことを

前大納言為世

きえあへぬ野原の雪をかきわけて我ひとりやは若菜つまゝし

早若菜を　　光明峯寺入道前摂政左大臣

わかなつむ衣手ぬれて行袖の野のかすみに春は雪そふる

宝治二年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時

早若菜　　前大納言為氏

里人は山沢水のうすこほりとけぬ日よりや若なつむらん

弁内侍

袖ぬるゝ野沢の水に影みえていつしかよねわかなつむ人

百首歌たてまつりし時若菜

二品法親王覚助

今はや若菜はしめしの春のとゆる春日の野への里人

朝若菜を

前中納言定家

霞たちこのめ春雨きのふまてふるのゝわかなけさは摘てん

百首歌よませ給ひける時

法皇御製

山風はなをさむけしみよしのゝよしのゝ里は霞そめしを

永仁元年百首歌奉りける時同し心を

衣笠内大臣

立のほる霞もしらぬ年の中に梢をこめてのとけき春哉

弘安元年百首歌奉りし時

前参議雅有

よそにみし雲もさくらのうつりにて霞そかゝるかつらきの山

文永二年七月白河殿にて人々題をさくりて七百首歌つかうまつりける時橋霞を

前大納言為家

まつの海やうらみくゝる春のよやかすみにまよふあまのつり舟

題しらす

順徳院御製

なかめやる月の出しほのかすむよを春の霞にうつしける

弘長元年百首歌たてまつりける時 霞

前大納言為氏

難波かたかつらふくあしのやへ霞こえてなけゝる春の曙

建長二年詠三首歌を合せられける時 江上春望

冷泉太政大臣

こき出る入江の小舟かけもなく浪路にかすむ春の明ほの

百首歌奉し時 霞を

権中納言公雄

和田乃原かすめる磯を限にて雲そよそにはよする白浪

河霧こしふ中をよそに隔けり

太上天皇

春しくいつきよし流もうち出る春とやうら川の春の曙

弘安元年百首歌奉りし時

入道前太政大臣

うちなびきやなぎの糸の春めけて玉ぬきかけしに置ける白露

[illegible]院屏風に

藤原定家朝臣

峯の雪はふかみともあへ山里にまいさくとも人梅のしるしとめまし

高倉院御時家の梅をよまれ

けるまよもしてむすびけり香をはける

皇后宮大夫俊成

九重にまいりてさらぬ梅の花やどのまずより春をまつらむ

文治六年女御入内の屏風に

後京極摂政前太政大臣

梅花まいりし野べのかくなふかく我宿の梅をも忘れにし哉

人々に百首歌めされけるついでに鶯梅

今上御製

木のもとやうつりにほける風のさそいに思梅の香ぞする

百首歌よみし時

藤原為藤朝臣

さそいくる人やなれし梅の花それよりはその香ぞのこれる

建長六年三首歌合に同心を

少将けは

折くらふ人もとむらも仍梅の花匂ふる袖のにほひなる

題しらす　法皇御製

むかし又まれいやちらん梅の花さそふ袖よりうつりさめ

光明峯寺入道前摂政家の哥合に霞中帰雁

正三位知家

思ひぬる川路は雲のまよひ雁の声のみさえくもらむやは

関路帰雁といふことを

前大僧正慈鎮

帰る雁人のまゝにも出にけり関のとのかゝる雲のかよひち

春の哥の中に　藻壁門院少将

わかれしもしらぬやまちに帰る雁おもひきえぬの夕の雲

文治〔永〕二年七月白河殿にて人々題をさくりて七百首の哥よみ侍りけるに花下忘帰といふことを　後嵯峨院御製

みる人の家路はさらに花にのみまとゐしも帰る春の人まて

弘長元年百首哥たてまつりける時春雨

前大納言為家

春雨やめくみの袖もうるほへす雨すゝの（風）ふかいへしもまてかも

建暦二年内裏詩哥合に

参議雅経

なれ〳〵て見しはなごりの春ぞともなど白川の花の下かげ

題しらず　衣笠内大臣

春霞たちしを見しよりぞ吉野の山の桜をも雨ふる日はまつ

西行法師

よし野山人にこゝろをつけかほに花よりさきにかゝる白雲

後法性寺入道前関白右大臣に侍りける時百
首歌よみ侍りけるに読侍りける桜

後徳大寺左大臣

ふもとまて花さかりしなかくさめにかゝるしら雲のかゝる白雲

待花といふ心を　前関白太政大臣

去年のおもかけの心ならぬさかりに有しよりけふ花の雨そゝき

二月の廿日あまりのころ大内の花みとてよしある小侍従

侍りけれはいまたさかぬ枝にむすひつけ侍りける

従三位頼政

思ひやれ君かためにと待花の咲もはてぬにいそく心を

返し　小侍従

あふまてといつのきさらきは咲ぬる花をはちりしまちしかは

霞中花　前大納言良教

いつしかと花のたよりをさそひけよかすみのうちにもにほふみよしの　また

弘安元年百首歌たてまつりし時

前中納言為兼

山さくらもや咲にけらしかけてや霞をわけて匂ふ春風

院みこの宮と申ける時三百首の歌合に霞間山花

といふ事を

大納言隆博

咲にける尾上の桜色みえて霞の間よりまかふ白雲

春の歌の中に

前関白左大臣

三笠山高根の花や咲ぬらん色ちさをみれはにほふ白雲

中務卿宗尊親王

音羽山花さきぬらしあふ坂の関のこなたに匂ふ春風

中務卿宗尊親王家の歌合に花

前参議能清

今日も又みなれし山路よ尋きて外のさくらの花をみつるかな

雲居寺の花みにまかりけるよし按察使隆衡申ける

に返しつかはしけるをうらみけれはつかはしける

西園寺入道前太政大臣

おもひやれ人やゆるさて散りにけるとしへて待し桜を

返し

按察使隆衡

かはらしの色をも君にみせよとてしるしも見えし春の山里

文永百番歌合に

従二位家隆

ちりしなれし木すゑかはかなし山桜
またとも見ぬ花をおもふ人

新後撰和歌集巻第二
春歌下
弘長元年百首歌たてまつりける時花
常盤井入道前太政大臣
なにはかものとてもかくさくの初風の山は花ゆゑつらし
正治二年後鳥羽院に百首歌たてまつりける時
藤原隆信朝臣
かつらきや高間の山の峯つゝきあさゐるくもや桜なるらん
題しらす
太上天皇
よし野山尾上のさくら咲ぬれは[illegible]花の白雲

仁治元年百首歌よみける時花

前大納言為氏

山桜さけるたかねは風寒しかつくさゝの花にみゆる白雲

山階入道左大臣家にて十首歌よみ侍けるに寄霞花といふ事を　前右大臣

山桜みかしハを何とかくしまし霞の袖にあまる風かな

山花をよめるとよみ侍ける

今上御製

よし野山花も都にけふよりは霞ぬらへの花の上かも

百首歌よみし時花　前関白左大臣

いくたびも花にもかはらぬ雲を桜とつゝく峯のこゝろも

天台座主道玄

立かへる我身のうへは山桜かはらて花の色をみよしや

同じ心を　平貞時朝臣

山高みかねて見し色も花の色と桜も雲のかすかの

従二位行家住吉社にて歌合し侍けるに

松間花　式乾門院御匣

みよしのは松かへしてもにほひけるは里小野の花の白雲

寛治元年十二月歌合に山花

万里小路右大臣

よし野山みねにかゝれる雲のまよひは花のさかりのそこにけり

山階入道左大臣

山風はしきて高峯のおのへなるさくらさくらをよそにみるかな

千五百番歌合に　　従二位家隆

久かたの雲ゐのよそにさくら花ちりてそら自ふは春の山の色

人とはゝ百とせまてもみしけりなへてまた花

太上天皇

吹風もおさまれる世の中よおもて桜をさかりしるらむ

位よおほしくけるみよのかこともなき花盛久

こともしくるをりのそらにけるしきかな

院御製

外よりもちるは日数やつもるらん我九重の宿のさくらは

花の哥の中に　　前関白左大臣

わきて猶むかしの春の面影を有さへも又の花にみるかな

権中納言公雄

春雨のふるにまかへてもみゆくもしほるゝ袖は思はれけり

三十首歌よませ給ける時見花

新院御製

九重に春はいくとせなれみしさくらは花かさしをみてもあかぬ

弘安元年百首歌たてまつりし時

前大納言忠雅

いつまても花にゆへつくるかのやまのこかくる峯の白雲ハ

山花似雲といへる心を

前大納言兼宗

よし野山みよしのゝさくらかくれもしてや花の雲とふるさとみゆらん

光明峯寺入道前摂政家の三首歌に雲間花

藤原光俊朝臣

よし野山高くもゐてたゝさもかゝにみえぬものゝ色かな

守覚法親王の家にて五十首歌よみ侍ける時

寂蓮法師

木のもとを帰る出人やよし野山きぬハ花の名をもみつらん

花の比人のもとにつかはしける

前僧正公朝

思ひやる心のうちに折る花はあたしもえやはおもふらん

返し

西行法師

わくのみんいさしらすとてちる花の後の春にあふへき

刑部卿頼輔

桜ちるよしのゝ山風ちらさらむ花のあたのちるよ

従二位家隆

山さくら又しらくものまよひぬるみはそらのくもそかゝるらん

寛治元年十二月哥合に山花

むかしにかへる山の坂こえて今をしもさかりの花をとふらん

前大納言為家

みよし野のおくゆく花はさかりは我思ひそめし道のしるへかな

後鳥羽院下野

花の哥の中に

権中納言実家

うつりゆくみ山はかねのさくら花ちるもしらすにおとは聞えし

みやこには霞のよそになかめしもふみ分て来れは花のしら雲

後京極摂政前太政大臣

権中納言長方

いさ桜はよし野の山も山まつこ花のさかりは人まいりて我ら

後京極摂政左大将に侍ける時伊勢勅使にて

くたり侍けるにもおなしく鈴鹿の関をこえて

花のもとにおもひをのへてよみ侍ける

前中納言定家

君思ふ我や鈴鹿の関越てふり捨てこし花のなこりを

白河なる所に花みにまかりてよみ侍ける

俊恵法師

かつみしと思ふ人のあらはこそ折ても花を家つとにせめ

花留客といふ事を

隆信朝臣

きのふまて見る人のあるをは花のちるをも見し後そみるへき
題しらす　典侍親子朝臣
まてしはしやとる花のかけにしもまた見ぬ人の雨もふらなん
百首歌奉りし時　前大納言為世
をちこちの山のさくらはさきにけり人の思ひはいつやこよひ
山家花を　清原家信
問ふ人は思ひたえぬる山里にきてみれはての花もさかりを
津守国助
都人こゝろやいかにや嵐の花まつみにわすれしは
花下惜友といふことを
祝部成茂
又もこん春をや人はまちしにはちる花をしみ
題しらす　信実朝臣
かへりて又こむこのはるいくたひの花に命をおしまるゝかな
月花門院
雨のあしたに見しかけり桜花ちるをもみすてゝ別なれぬを
前大納言為家家に百首歌よみ侍けるに
藻壁門院少将
わたつみの峯の末の桜花風まつ雲のしるへなりけり
春歌の中に　鎌倉右大臣

かはらやかる君か桜田の山おろしに春風ぞふく

弘安元年百首哥たてまつりし時

前大納言長雅

今はゝやちりもしぬらん人はいさしらぬさくらを

題しらす

法印定為

とめて猶ちるをもまちし雨の程すきうけるは夏の花にみゆらん

西行法師

なかしかくわかれ行ける花なれやもしよ中をは見たくもあるかな

順徳院御製

春よりも花はいくかもなき物を強にもおしめ鶯の声

常盤井入道前太政大臣

春霞たちこめたる花はいくたひあるものと咲ける

百首哥よませ給ける時花

法皇御製

春風よ咲ける花の末まてもさかりにとめよ

花の歌の中に

前京極道納言

桜色にかすむほとなるさくら花春風そふく

内裏に百首哥たてまつりし時折花

右大臣

それと折らぬ桜花にもかせのふくらん

落花　　前京極中納言

いつもかくしらぬ名のおもかけにたちそふ花は風もいとはす

題しらす　　よみ人しらす

もろともにおしみしかひもなき山桜風は心のあるそうれしき

久安百首歌奉りける時　　左京大夫顕輔

命をそちる花よりもおしむへきつひにさそはぬ世しなけれは

皇太后宮大夫俊成

さくら花思ふあまりにちることのうきをは風におほせつるかな

花の歌の中に　　前僧正道性

ちれはこそ風もうらむれ思へとも花のうへにはいかさまにみる

遊義門院

わかまちし桜をもちて桜花ちるさとまてに春の風かな

内裏に百首歌奉りし時落花　　遊義門院権大納言

うしと思ふ風はさそはてやはらかくちらぬも花をまちてみし人は

仁安元年百首歌奉りし時　　典侍親子朝臣

雨そそく風やいかにと花まつる我も思ひわかれし

洞院摂政家百首歌に花

皇太后宮大夫俊成女

まちえても風よりさきにはらふ人のまつ山里に数さくらかな

題しらす

前内大臣実

わするなよやよひの末にふく春風はさそはゝ我やとる花の心を

正三位経朝女

春しにさそはゝ我くれし花あれは桜や風のやとりもとむらん

源兼氏朝臣

花の香をたえやはとめし相坂の関もる(ち)さへもゆるす(を)(く)春の風に

正三位重氏

滝のうへによせくる波はあらし吹こす峰の上の桜なるらん

正治二年十首歌合に落花

前大納言忠良

みよし野は花の上つたふ雪ならて雨にはらはぬ雲そちりくる山風

同心をよみ侍ける

院御製

あらし吹木のしたつたふ河よりもちりぬるかけも白雪

千五百番歌合に

醍醐入道前太政大臣

花のちる山路の行人のみなくもちりぬる宿の雪とみるまし

大蔵卿有家

さらぬたにあかぬかたみゆる春の月ちりのまくまに花の隠れん

春歌の中に　常盤井入道前太政大臣

咲花と思ひしよりもうつりけり世の中の春の明ぼの

従二位家隆

あすも猶きてみはやつかしと桜花ちらぬ庭の雪とは

入道前関白家にて落花といふ事をよみ侍りける

前中納言為兼

ちる花を又吹さそふ春風に庭を花のまゝにみる跡もなし

百首歌奉りし時花

前大納言実教

此春の日数は花をさそひける風のつらさに何恨むらし

百首歌の中に　前中納言定家

なれなれや思ひ乃おくれぬ桜花風にまかせて見る空のうき雲

九条左大臣女

霞そへし花よりあとの春の夜はまつ夢おもふ夜のはの面影

寛治二年百首歌奉りし時春月

従二位親氏

むら雲を何のひかりにまかせよの月の影めくる花は後まさりにけり

春曙月を

前大納言為家

花の香はなほ霞にかすむ明くれてかすみのかゝる春のよの月

百首歌奉りし時歟光

尚侍藤原頊子朝臣

山吹のうつろふ花のさかりはや井手の里人まちこえつらん

百首歌めしける時　崇徳院御製

款冬の花ゆゑにあやなくも井手の里人心いかにしるらん

題しらず　衣笠内大臣

駒とめて井手の河波をかけれこそうつろふれぬる山吹の花

百首歌奉りし時款冬　入道前太政大臣

山ふかき谷の花の色ふかしいかにもなしや春のなこりは

春歌の中に　平忠盛朝臣

春風はゆくともみえすすきる緑の松の末にのこる藤なみ

前関白太政大臣

年をへていく春もみるさし家のかかれる松の藤浪

題しらず　順徳院御製

かきしれは思ひ出流もかなる行春の名残なるらむ
暮ぬるをにをしみけむ人の心そうこも春

春暁月といふことをよみ侍りける

前大納言為世

暮れなくてのこるかけを暮てかすまぬそらの有明の月

後京極摂政家六百番歌合に

従二位家隆

あらしふく花の梢に霞みて春は[illegible]ゆく志賀の山こえ

如願法師

暮春の心を

くれてゆく春の別はいつとなく花をおしめ人よとまりや

前大僧正慈円

今もちる花はいつかのこゝろの身に六十あまりの春そ暮ぬる

後京極摂政前太政大臣

暮てゆく春の[illegible]花は[illegible]絶

堀河院御時百首歌奉ける時

権大納言公実

ゆくかたもしられぬ春こそしたはるれ何方へのわかれなる[illegible]有[illegible]

新後撰和歌集巻第三

夏哥

更衣のこゝろをよみ侍ける

院御製

ぬきかふる名残や袂のこるらし花の香うすき蝉のはの衣

題しらす

順徳院御製

山城のことはの杜は名のみして下草はいつく夏は来ぬらし

住吉社によみてたてまつりける百首哥の中に

皇太后宮大夫俊成

いつかれは日影もむしのふかつは草月のかつらの枝をそみる

条の波あまく思はしをよみける

前京為藤朝臣

しらこや咲そふ花のわかは草かつらのはもかさしとそ

夏の哥の中に

権大納言顕朝

郭公しのふるころもおとはねもこゑしをいつこに咲る花

夏百首哥合に

前大納言忠良

思ひはいつくに鳴く時鳥花のさかりにいかになるらん

弘長二年十五首哥よませ侍ける時郭公

花山院内大臣

ぬれ袖はしらすそのくもの京思はん声もあまりて物思ふ郭公

題しらず

法性寺入道前関白太政大臣

わかれても人まつとしも此里に雨にまさりてなくやまほとゝきす

百首歌よみ侍ける時郭公を　前大納言為世

まつ宵をきと我となくつゝ夕暮に待かねつる郭公哉けり村

内裏に百首歌たてまつりし時待郭公

右大臣

夕くれのまにまによのふけぬれは待る月よおもはすまて出一声ものかな

遠夜待時鳥といふことを

修理大夫顕季

きえかへりいくよまてかの夜出てし山郭公今やなくらん

弘安八年八月十五夜三十首歌よませ給し時暁待郭

公　前大納言経任

時鳥待るもいまきつとよこそにむのもりの思ひわかれまし

題しらず

院御製

人をとく猶ぞなかしを郭公我にはかせしの行もしれなき

百首歌よまれけるに霍公

法皇御製

行かへり待たる人をかけすもしぬきけくてもなかぬなき哉

同心を

按察使實泰

ゆくとらにもおもをたてのこゑ待るはいまはくさのとく行くらん

大蔵卿隆博

まもりこし神こそしらめ春日山今もむかしのあとの宮人

平時村朝臣

しらてまゐり我人こゝろのすきまより京の秋よりまゐる月かな

承久元年内裏歌合に暁郭公
前中納言定家

ほとゝきすくれにしかたの山かつら今や里人なけてまつらん

洞院摂政家百首歌に郭公

藻壁門院少将

ほとゝきすみ山出てほとゝきすなのこゑの福音かなふ

夏歌の中に

平宣時朝臣

時鳥我まつ夜ゝのねやのひまに驚かされてしのはるゝかな

道助法親王家五十首歌中に思郭公

法印覚寛

まつ人をまちかねてきく郭公却してしのゝめの思ひとそなる

仁治元年百首歌よみける時郭公

後二條院家

足引の山ほとゝきすおもふねをわすれて鳴る夜半の暁

題しらす

藤原隆祐朝臣

しのゝめの山のはなるゝほとゝきすなの里ちかく福音鳴くなり

後法性寺入道前関白右大臣に侍りける時家に

百首歌よみ侍りける時郭公

刑部卿頼輔

かたにまつ時やしのびしよりしるしは初音を関と思へこ

聞人を

平親氏

いかにせん我まつ初音を郭公それぬ関の初音なりけり

住吉三十首歌中寄関郭公

入道前太政大臣

思しにあのはみすし杜鵑こゝろ人のこゝや初音なるらし

洞院摂政家の百首歌に付鳥

前大納言為家

郭公まつの森の木がくれにいくたび今日の夜をかさねし

正治二年十首歌合に聞人を

前中納言定家

待雨のすゑも中山ほとゝぎす一こゑ鳴門しはしりしかは

題しらず

よみ人しらず

まち侘て稀にきこゆる初音をも付るとて一声は夢のしらねかな

権中納言長方

ほとゝぎす雲ゐのよそに一声はきゝつとみやこにいはねなれそ

郭公の初音といふ事を

法印長舜

郭公今一声とまちかねてやすらはれしも思ひいてつるかな

藤原雅孝朝臣

ゆふまくれ浮雲かかる郭公すきまの空にほのかなる一声

源俊頼朝臣

子規なくひの山にうつりにしはまたおほつかなき人まよふらん

権中納言経平

鳴すてゝいつちの山に行つらむ程なき海のまよひにたえつる声

中宮百番哥合に

宜秋門院丹後

行くるゝ雲のかよひやみちくさの雨にぬれて摂山の月に鳴よふ声

夏哥の中に

前大僧都教定

雨くもる夜半のくもゐに郭公なく音はかりそ人もなきけれ

前治観王

郭公すみける里のしるしかな初声の人にまたやこゝ

従三位氏久

岩にかゝる鳴もよのまゝ郭公初声をきく人はかよ

祝部成仲

ほとゝきす朝くら山の明かたに人もきくらむとしても

よみ人しらす

郭公雲のいつくにかくるらん声もきこえて明ぬるそらの月かな

寛治百首哥に時関郭公

前大納言泰良

引うゝす田れもし時のかつうつろひそのゝ情のあまりに出つゝそ

仁安元年百首歌奉りし時

前大納言良教

あれさてゝ後はいつかしらぬ昔いつはりしらうつそ人

題しらす

式子内親王

むかし思ふむらさめにそゝのゝ花ちる庭に[illegible]

入道前太政大臣

五月雨はそのゝ外しや花たちはなにしらるゝらん

前関白太政大臣

あやめふきてむかしを思ふやつはしに[illegible]

六百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

たつねにあやめの枕あはれ[illegible]

文治百首歌よみ侍りける

左京大夫顕輔

かくれぬはあやめもしらぬ[illegible]

中宮に申ける時五月五日菖蒲の根につけて

儀門院に奉られける

永福門院

なけてみよ人のこゝろ[illegible]

述懐　　遊義門院

天の代乃めくみしるらしまもれるは源も人の心みえなん

宝治百首歌よませけるに早苗

前大納言為家

道のへの小山田のみしめ引もへてたてゝ早苗とるらん袖のさなへこそ

弘長元年百首歌よませけるに五月雨

信実朝臣

早苗とる田子のもすそもそのまゝにほさてふりぬる五月雨の比

弘長二年内裏五十首歌に里郭公

前大納言為氏

今は又しのふる里のしのふもわすれね五月の有明のそらに

題しらす

鎌倉右大臣

引うゑしきけしもあらす橘の花ちる里の五月雨そふる

袖に五月雨こひしきを

後鳥羽院御製

五月雨の雲もしそゝるみつのこゝろのすけをやつるは

前大納言為家家にて百首歌よみ侍けるに

信実朝臣

さなへ採るのれ氷のみちしのゝ風もなくしてうつ五月雨の比

百首歌の中に

従三位為継

名こりよ川きしにわつて小埋木も瀬よりとこへ行さ月雨の比

仁安元年百首哥よみし時

前大納言為氏

滝川きしにみちくる水の音羽川きくもすさまし五月雨の比

河五月雨といへる心を

右京為信朝臣

五月雨にゆふしかけしのふみならし川上の瀬くいしく水のまさりて

前大納言為家日吉社にて哥合しけるに江上

五月雨を

従二位行家

ありあけは江やとふたのゝたえの声のゝもと花流にゆく五月雨の比

承暦二年内裏後番哥合に五月雨をよみ侍ける

前中納言匡房

さみたれは田子のもすそや朽ぬらん衣手よりそ雨はなけれは

覚法親王家五十首哥に

従二位家隆

立のほる烟もしにかけて室の八嶋のさみたれのころ

題しらす

殷富門院大輔

山かけの軒はの烟もたえてもれぬいかならさみたれの比

源兼氏朝臣

五月雨に入ぬる磯の草よりも雲間の月そみることすくなき

祝部成久

みしかよはあし間にやとる影なからやかて入江の夜はの月の影

源俊定朝臣

風そよく軒端にかゝる月のよのあけかたに夜も涼しさ

衣笠内大臣

天の戸のあくる程なきみしかよにいるかたとをく残る月の影

名所の哥よませける時

前中納言定家

わしのやの松の夜半よりのかたみしかく明る夜のよるなく

中院入道右大臣家にて水鶏驚眠といふ心を

道因法師

夜のまくらかさねつゝ明る戸をたゝく水鶏の声にまかせん

鵜飼しける

後法性寺入道前関白太政大臣

さ月やみかゝりの松をともしにてあまく入さの山こしにそする

前大僧正慈円

のかれしぬ程もまちて夜川の早瀬にたくるかゝりの篝火

後光明峯寺前摂政左大臣

篝火のかけもうらかく波まよりさすや川の明かたの空

前大納言為家

月なくてよ河にさしける篝火もみなしかつらの光にそみる

百首哥よみし時夏月

院大納言典侍

急雨の露さへこめて月影の涼しくやとる庭の夏草

水邊夏草といふことをよみ侍る

藤原秀茂

茂りあふ木下に清水はなかれけり田川のほとりの野への夏草

夏草の中に

山階入道左大臣

なほふかく今も人めはまれにして茂る夏の草にわかれよ

藻壁門院少将

玉もかる野島かさきの夏草に人もすさめぬ露そこほれて

藤原景綱

かくるらん難波のあしやの夏かりにあしのね分し夏の影もみえけり

鷹司院按察

千早振神にまかせて思ひにもみたらしけさへ螢さへみえけん

海邊螢を

左兵衛督信家

更ゆくをいはする螢の思ひ川見えつゝはかなき浪のうへにもゆらん

弘安元年百首歌奉りし時

安嘉門院四条

滝川にきえて思ふ螢の光こそ思ひなくさのよそよそに道

建長三年吹田にて人々歌つかうまつりけるに

後嵯峨院御製

いかゝする野沢にみゆる若草は雪まをわけし人やかよひし

題しらず　前中納言俊光

夕されは野への草むらをとふ人もすゝしく木の下かけに秋やかよはん

前参議俊實

夏草のしけみの葉末くもりなくまかふ光に見えてうつろふ

瞿麦帯露といへる心を　内大臣

夏草のいはれにもまさる籬にも盛を見するとこなつの花

院に三十首歌よませ侍りし時樹陰納涼

入道前太政大臣

すゝしさは秋にもまさる山城のふかくさ山の松の下風

百首歌よみ侍りし時夕立

前中納言為方

吹風にゆく雲見えて涼しきは日影へたつる夕立の空

弘安元年百首歌たてまつりける時

前大納言為氏

夏山のみとりのなかの風すゝしくもまかふ夕立の雨

夏百首歌奉りし時　後京極摂政前太政大臣

ひくらしの鳴音に風を吹かへて夕日すゝしき岡のへの松

題しらず　後徳大寺左大臣

日くらしの声する山の松風に岩間をくゝる水の涼しさ

平貞時朝臣

むすはすもやとる月影も涼しくうつる山の井の水

五百番哥合に　惟明親王

松陰の岩井の水の夕くれに秋をむすふる人や旅を待らん

水月如旅といふことを

前大納言経房

水の面にすむ月影の涼しさは宿とや旅のよそひなるらん

題しらす

後九条内大臣

よし野川滝つ岩浪ゆふかけてわたる人や　みかへるらん

新後撰和歌集巻第四

秋哥上

守覚法親王家五十首哥に

前中納言定家

敷たへの枕のうへにすきぬなり露をたつぬる秋の初風

久安百首哥に秋のはしめの哥

左京大夫顕輔

衣手のまたうすけれは朝風のこゝろすゝしき秋の初也

題しらす

後嵯峨院御製

我の袖に秋まつしはしはなるゝミえけるさいにありて露の上る王

前参議雅有

涼しさもきのふにかはる夜な夜なみなしもしの秋も初風

洞院攝政家百首哥に早秋

後九条内大臣

いつしかとおきてみる荻もそよやこゝろ涼しき秋の初風

荻風告秋といふ事を

前中納言為兼

秋きぬとおもひもあへぬ荻のはにいつしかかはる風の音かな

秋哥の中に

藤原隆祐朝臣

吹ちらすゆふ雨の荻の夕露を秋よりのこす秋のはつ風

山階入道左大臣家の十首哥に初秋露

後嵯峨院

をしなへて物思ふころのあはれみいつの世も涙に袖は露そこほるる

読人しらす

左近中将具氏

あかて出る月日をまつもなくさめて七夕いかの契ありつらん

常盤井入道前太政大臣

待わたる天のかはらの久かたのあまのかはらの夜半の夕霧

雅成親王

久しくまちしもまたしとおもふに星あひのかはの橋を待ちかねつ

正治二年百首哥よみける時

宜秋門院丹後

天の河あふせの契いよよのさしてそかはらぬ世ゝのもし

七夕の心をよみ侍ける

院御製

織女にことしもあらし鵲のわたせる橋の雲の上の契は

前大納言長雅

かさゝきのわたせる橋や七夕の袂を雲にかよふ契ならん

権中納言公雄

漕ぬへきかはらぬかけの袖にみて帰るへしみえぬ夜の妻山の久しき

尊治親王

西秋まつ恨こそわたしもたなはたの契の恨なけれとそ

七月七日内裏にて七首歌よみし時

前大納言為世

貴秋もとせかけてみつる水の井にうつる星合の空

後京極摂政家の六百番歌合に

前中納言定家

秋しにこそね星合のさよ更てたちするかの庭のともし火

七夕を

新院御製

秋風もよそに涼しくかよふなり天川星合のよや更ぬらん

春宮大夫通重

逢ことの契もしらね秋をへていくよかさねつ天の羽衣

百首歌よみし時七夕

藤原為相朝臣

久かたの雅やかなるそらかくるのかよひ路もまつ天の川波

文保百番歌合に

後宇多院御製

玉鉾の道の芝草うちなひき都に秋風ふく

春日の社によみ侍りける歌の中に

前大納言為氏

秋風をまつの下葉に待えてもこよひやたのむ秋の夕暮

秋歌の中に

藤原伊信朝臣

さのみやは萩の葉そよく秋風を聞もすくさむねさめかちにて

山階入道左大臣家の十首歌に閑居秋風

三条入道内大臣

人めこそかれぬ宿の萩原はそよくにつけて秋風のいつこよりかは

題しらす　法皇御製

秋はたゝ思へとや萩のはの風も身にしむ夕くれの空

光明峯寺入道前摂政家秋三十首歌中に

弁内侍

あつらくる萩のうは風の音はかれ思ひそへたる秋の夕暮

題しらす　西行法師

萩乃はを吹すくしける風の音に心みたるゝ秋の夕くれ

弘安八年八月十五夜三十首歌よませ侍しに秋風入簾

津守国助

いくかよる萩のしけ葉をはらひきて簾のすきまに入秋風哉

秋歌中に　平行氏

あるてハ聞しるらむ萩のはの音やむかしの庭の秋風

平宣時朝臣

心れつゝ秋風吹てあるゝ庭の浅茅の露もたまらし

文永二年今日野外秋風

前中納言[illegible]

夕されは野への浅茅にをく露を末葉にかけて秋風そ吹

従三位隆教

なかめゆく野らのさゝ原さらさらに雨しく露に秋風そふく

藤原為藤朝臣

夕暮は浅茅乃野らの露なから小萩をこえて秋風そふく

建長三年九月十三夜十首歌合に山家秋風

後嵯峨院御製

山寺のこすゑもしらぬ夕月のしつむ鐘の秋の風そさそふや

名所百首歌よませ給ひける時

前中納言定家

氷室乃岳のゆくすゑあまの原なる里のよるへに秋風そ吹

題しらす　今上天皇

なこしあへすゝ秋なけれる白露の玉ゆく葛に秋風そふく

入道前太政大臣

吹風にしゐへ出草葉の露よりも秋の心そまつしられける

式乾門院御匣

うつり行むらさきの露そふかき秋はいつしかさそふ秋の衰へ

文保百番歌合に　二条院讃岐

人はみな人のかはれる秋なれや影ともなけれ白露

題しらす　今上御製

うつらなく野原のあさちおしなひて夕暮ふかく秋風そ吹

鎌倉右大臣

なのなかはゆく秋もしらぬ物思ひやへの垣られ秋の夕暮

土御門院御製

荻はの風きりつゝなかれけり旅人のすきる野の原に秋風そ吹

建保百番歌合に　惟明親王

旅人もこゝろしらぬ野への花薄まねくとみえてや暮にかゝる

百首歌奉りし時　天台座主道玄

都辺の秋風のまよひに萩の花散人にここちなく枝やわけそ

三十首歌よませ侍ける時草花を

新院御製

夕暮はおもひの末に露ちらくなひく尾花に秋風そ吹

後光明照院前関白家にて人々すゝめ侍けるに

十首歌の中に　従二位行家

夕されは秋風吹てみのましもおもひなりへて暮そかなしき

弘長元年百首歌たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

旅人のいる野のすゝきかたかに出る袖の枝さへ秋風そ吹

秋歌の中に　入道親王道覚

露むすふ小萩の露こほれる女郎花たなひく色に秋の夕暮

よみ人しらず

あさにのこいろ秋の野への女郎花うつろひやすくもさける花かな

延喜三年九月十三夜亭子院にて朝草花

参議右大弁

朝霧のたつ野原しの原かきわけて我衣手の萩か花すりとも

萩を　仁和寺二品親王守覚

おもゆのかぬの枝にもうつろし露まてもしめの萩の花さかりて

百首哥よませ給ひける時同し心を

後鳥羽院御製

いとゝ又露をそへてや雨ふるころ萩もちるらの花のさかりの秋のそはねぐ

権大納言公経

あらし吹野への雨さへ納めて庭の萩さへおもう上露

題しらず　民部卿資宣

秋萩もおなし色なる萩の花に雨のかゝる色の秋

平親清女

思ひつる庭の萩もちりにけり今はあはれや下葉の色もかれぬらん

式部卿久明親王

鳴鹿のなくなる声をうつくしく小萩か原の花もいつらはあたなる秋の

鎌倉右大臣

夕されは野ちのゝかやにうちなひき秋のみたれて萩も咲けり

弘安七年秋の比白河殿御堂に遊ともなひて人々の萩の花をいひしらぬ山まてよみてつけけるをはちすの秋又ちるへきよしの奇河の池ハ秋に御前まめしく哉をしはしのみよ

みるからに花よりすゝしいけのはし

前大納言為世

今しも又みやこの秋の花やかにしもしすへ秋の白露

題しらす

慶運法師

うつりけるたえのまそゝしら萩草のもとけに花は庭のおもかけ

惟宗忠景

ゆふ日さす京多ゝ山路の山かけにいつるの小野に鹿そ鳴なる

詠三十首哥中に　野鹿

入道前太政大臣

ゆふ山のふもとの秋ハ長夜すから野の風にまかせ鹿の鳴こゑ

建長三年九月十三夜十首哥合に暮山鹿

後嵯峨院御製

暮ゆけはかさなる山のしけみよりかけてや鹿の声をこふらん

兵部卿隆親

夕暮はさこそあはれ秋やさらに妻問山の鹿のなくらん

百首哥中に　鹿　津守国冬

都にも秋くきけは小倉山めしね秋に鹿もなくなれ

又百首歌合に　　寂蓮法師

思ひやる人の行しきこゆなり外山のさをしかの声

建保三年内裏歌合に

信實朝臣

秋の野のお花にまじる鹿の声は色にや妻を恋わたるらん

題しらす　　前参議雅有

宮城野の萩の下葉に立かくれ我や秋の鹿の妻をこひける

後嵯峨院御製

かた交野は秋けれはやさをしかのなかぬ日もなく声のきこゆる

文永二年九月十三夜五首歌合に野鹿

兵部卿隆親

これも又秋のなこり歟にける宮野のさをしかの声

秋の比人を待て小野に雨の夜をなかりける鹿

のなこりけれは　　西行法師

鹿の音をきくにつけても住人の心しらるゝ小野の山里

題しらす　　よみ人しらす

うかりける我身ひとつの夕暮をぬれてひかしや鹿もなく

百首歌よみ侍ける時秋夕鹿

昭慶門院一條

ゆふくれはすゝけのゆめをさそふらしのをきのさえし秋の夕ハ
旅寝の中に　　従三位氏久

山のはにまくらならへて月は出てまたすみの旅枕の夢
　　中務卿宗尊親王

小萩原かりしくのゝ床なれや手枕しても旅寝て夢をまつ
　　法眼慶融

風すさむをのゝ篠原妻こめて宿かる旅もしかそなく夢
　　平時村朝臣

田家旅を

いほりつくるかりいほしきすむ山田もるいねの秋のさむしろかりの夢
驚かしらす　　清輔朝臣

思ふ事ありしも旅の寝覚をきつゝあかしかね秋風の夕
　　権中納言公雄女

ありのみそへさらつ玉章はかけれとも見ぬに帰るかり旅寝の夢
　　慈寂法師

故郷を遠くみる山の末になりて今宵都に旅はあくらむ
　　式乾門院御匣

鶏鳴や山路にかゝりしてくる旅寝をもわきてみよ月影
　　衣笠内大臣

明ぬるの手井の旅寝の夢をかりしておく山の霧より出る月のかな
弘安元年百首歌奉りし時

常盤井入道前太政大臣

月ゆきは道こそみゆれ秋の風寒く川霧のよそに清けく

旅歌の中に

大炊門院御製

かさゆきの鳴ころもくす朝霧にやどもさそふかあはれ小舟

法印定為

あまのすむ磯辺の浪遠ざかるゝ霧吹のこす旅の浦風

入道前太政大臣

さへ霧の内ゆくのへてこえゆけばみするる旅の夕の色

藤原泰宗

霧晴るる涼山の里は葉の戸[illegible]夕日影哉

月歌の中に

源兼氏朝臣

出ぬ秋こころにゆふ[illegible]山のはの月

藤原為道朝臣

くもる雨の月待出る山のはよりはれゆく旅風ぞふく

太政大臣

山のはよこきる雲にうつろひいで出てみゆる旅の夜の月

題しらず

中務卿宗尊親王

雲もなく夕風さむき嶺の上のこずゑはやかに出る月影

順徳院御製

旅風の枝吹しほる[illegible]山のはの月

土御門院小宰相

風のをともなくさえわたる山かせに月ゐら出るさらしなの里

平宗宣

猶しなく雲のこなたに出るまてわたしにしのふ山かせの月

百首哥奉りける時月

前中納言有房

霜もをく伏見の暮の秋風に月すみのほるをとはの山

延慶二年九月十三夜又よみ哥よ

前中納言為藤

すみのほる月のあかりはさえ晴て山のはとをくのこるくまもなし

松月出山といふことを

後光明峯寺前摂政左大臣

嵐ふく松のこすゑにすみわたる風のうへに月そ出ける

清輔朝臣家にて哥合し侍けるに月哥

俊恵法師

思ふまゝわけてやみまし秋の月雲も吹ちる風のまにまに

西園寺入道前太政大臣家にて開月といふことをよみ侍ける

信実朝臣

秋風は天彼のはらやぬれ西にかくしもあかりそわたる月のかけくもる

新後撰和歌集巻第五

秋歌下

弘安元年百首歌奉りし時

入道前太政大臣

わたの原八重の塩路をへだてゝも照月のかつらの里に秋風ぞ吹

中納言家成家の歌合に

刑部卿範兼

天河雲の波たつ秋のよはさえまさるらん月の影のしけゝ

文永二年九月十三夜五首歌合に河月

光俊朝臣

秋風はわたてこす浪の音すみてさやかにすめる秋のよの月

同五年九月十三夜白河殿五首歌合に河水

澄月

前右兵衛督為教

秋のよの月もさやかにすみわたる秋ぞにごらぬ白河の水

法印寛實

まさる秋川に秋はさえたる川の名の秋をきよくすめる月かげ

題しらず

法眼源承

由良の浦やあまこぎ出る音絶て入江の波に月ぞさやけき

院大納言典侍

秋のよは吹越ゆるの山風さえてわたしも月ぞうつる末の松浪

千五百番歌合に　　従二位家隆

住乃江の月に秋風のしらへハ松のこすゑに波風そふく

文永七年八月十五夜内裏女房歌合に海月

前大納言具房

雲もなき浦乃入江の志ら浪にみをしをかけてすめる月影

閑月といふ事を

後堀河院御製

思ひかく月も見てこそや河口の関のあらしの波もたつらん

建長三年九月十三夜十首歌合に名所月

前大納言資季

清見かた雲も浪にこめぬ浦風に月をそやとす浪のおもかけ

海月といふ事をよみ侍りける

今上御製

もしほやく煙もなくて松島やをしまの浪にもる月影

弘長元年百首歌たてまつりける時月

前大納言為氏

志ほ風の浪のよる夜をかけて月にあかせるすまの浦人

題しらす　　津守国冬

もしほやく煙の末も十日のあまにもるゝ秋まて月はみえけり

文永七年八月十五夜内裏女房歌合に海月

従二位行家

月すめはあまのもしほの煙まてにたえものから浦風そ吹

洞院摂政家の百首哥の月

藻壁門院少将

いつくにか塩やく煙はいくらんすまの浦風は月もくもらす

建仁元年八月十五夜和哥所撰哥合月

浦松風といへるこゝろを

皇太后宮大夫俊成

月の影さゆるしほの浦の松風はしみすゝみをとよする波かな

八月十五夜十五首哥合附姥浦

津守国助

浦人のこゝろのそこへくなく綱のしけうつ月の影してくる

海邊月を

従下家隆

久かたの雲井をわけて島隠る風吹上のさ浜は月すさけき

堀河院百首哥ともし附

権中納言国信

風わたる伊勢島の天晴てあかゝるは浦にすめる月影

題しらす

従三位為継

風の音もいつくしの姥上に丈の高さかしくすめる月影

尚侍家京現子納言

吹しほる姥風あらくいかにして志けるまたの月はまさし

中務卿宗尊親王

津の国の生田の杜は人ならて月にしくるゝよその秋風

前僧正公朝

春日のゝ野もりもみえす人やよそにみるらむ秋の夜の月

権大納言師信

むさしのゝ秋くも末にさくらぬれて月よみにしみて山のはの露

中務卿宗尊親王家の歌合に

前参議能清

秋風の野原の萩の夜かさね秋の月の影のうつりそふ

文永七年八月十五夜歌めされし時

野月といふことをよませ給うける

法皇御製

みやきのにうつりにけらし萩原の花野の露にやとる月影

宝治百首歌合に

後嵯峨院御製

小山田のいな葉のすゑにやとる月さえてかゝしけの風に秋そふくるや

建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合に田家

見月

前中納言定家

さく麻の妻ふく小田に露そへて月影さむし岩のへの宿

月歌の中に

前左兵衛督教定

秋山すそ門田のをしね稲葉ことにすむ月さよふけて稲葉そよくなる

入道重経

風わたる野への尾花の夕露に影もとまらぬ袖の月かな

遊義門院大納言

すみなれし我世の月のやとりかし里は昔の蓬生の庭

津守経国

くもりなき月をひかりの雲のうへのしくれもたえて松の嵐風

百首歌よみ侍月　右大臣

神代よりかはらぬ光やみかさの山のはのむかしの峰の月

右大臣家に百首歌よませ侍けるに　同

人をと

後法性寺入道前関白太政大臣

こよひしも我やはとこにいてそめし月をみやこの人の心は

百首歌よませ侍ける時

法皇御製

みる人のあはれにつけてあけゆける月のわかれよのはてもなし

内裏三首歌合に月前雲

前大納言実教

むらくものよそにもめくる夜半の月よそに嵐も吹のこしたる

題しらす

頼全法師

山のはを出ぬる雲のかつ出て雨にぬれたる夜半の月かな

建仁二年九月十三夜三首歌に月前風

大蔵卿有家

なほくぬれしらしも虎をかつゝ月をこの山の姨ほ嶺り

詠しらす

西行法師

身のうへに多く思しゝはなけれ共月を友にてあかす比かな

入道前左大臣

契あれはむかしにかへりてふしはいてもおもしろき姨の月かな

藤原重経

なくさめてはむかしの跡にたつ月はあはれこゝにも思ひ知へ

百首歌の中に

高階宗成朝臣

よしや身は老すともあはれしるわか身に思ふ心して月を見るらん

弘安元年百首歌たてまつりし時

前参議雅有

思ふ事ありしむかしの姨すてや袖をは月のやとりとはせし

弘安元年百首歌たてまつりけるに月

前大納言為家

清くこし姨はむかしの跡をたにしのふの月そみるらん

同し心を

前大僧正良覚

身になけく思ひの姨の旅寝にそ更ゆく月の影はかすまん

後京極摂政家月五十首歌の中に

前中納言定家

あくかるゝいきりもなかれはれわたるちかはる月のかけに

建仁元年八月十五夜和哥所撰哥合に深山暁月　皇太后宮大夫俊成女

故のよもきか家をうつめけるよし野の月の明かたのそら

海邊月と云しを　雅成親王

わたの原しほちもとほくてる月は明かたこそうかみ入けれ

正治百首哥たてまつりける時　後京極摂政前太政大臣

たれすまぬ野原の山しも我かしこもちよすからの床に鳴や

百首哥よみ侍けるなかに虫といふことを

今上御製

きりきりすなくこともみしぬ左の田乃くれ行草のかけに鳴く

山階入道左大臣家の十首哥に夜虫といふしを

よみ侍ける　三条入道内大臣

よもすからなく秋をいふくこときりきりす我よりまさる物は思はし

題しらす哥の中に　前京家隆

鳴わたる野原の山し思草おりにもしやよるにも成し

百首哥たまひし時虫　極義門院信大納言

故乃夜はしくるゝ所もさすかなるに(け)おほかる野への松虫の声

建仁(治)元年九月十三夜五首哥に野虫

前大納言為氏

秋の砧乃いほりに恨みくきあらくすさふ也八野への露にしほる

詠しらす　　源親長朝臣

こゝろして浅ぢへとてつきあかくすみわたるよはの露にしほる

道覚法親王家の五十首に

従二位家隆

門田もる稲葉の風やさむからし外の庵やまた衣うつなり

擣衣の中に

平宣時朝臣

秋きてもたれのいまたわかれにし月に人の衣うつらめ

弘安八年八月十五夜三十首歌よみ侍ける時夕擣

衣

藤原為道朝臣

風さむしゝする野の里の夕暮に月まつ人やころもうつらん

前中納言為方

秋の里に関もかはらぬ夕月よおなしかたにも衣うつなり

百首歌めされしついてに擣衣

今上天皇

さよふかく麻のさ衣うつ声に月すみわたる伏見のさと人

建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合に月前擣衣

前中納言定家

松風によるそふけゆく衣うつらん思はぬ月のかつらの里人

隣擣衣といふことを　今上御製

秋よるハ聞しやすらん関守もかきるよへてそ衣うつこゑ

題しらす　九条左大臣女

志もてる風も分まよふね覚のよすかに衣うつなり

百首哥奉りし時擣衣　左大弁經継

秋風の身にしむころのさよ衣うつもいくよの浮寝を結ふらん

旅宿の中に　前大納言為世

里人もさすかの聞しらむ旅寝のあはれを涙くきえのこゑのなかなか

土御門院小宰相

関人の月によし旅の妻つとも思ひいれすうつ衣のこゑ

寛治百首哥奉りける時関擣衣　前大納言為氏

よそにきく我ね覚のねにもあらはきの衣うつらん

題しらす　前大僧正慈鎮

ゆめもみし衣うつなりみ山松風さむき旅の寝覚に

祝部成茂

里ハいくよハの風やさむからん聞しね覚よそにつけてうつや

前大納言家雅

この里もよそにしはきこえ旅風よ我しゆめそ衣うつなり

法印寂信

長夜はねてもさひしきを鬼の音を聞しよりうつ衣の聲

百首哥奉し時擣衣

前中納言俊定

あきさむき山こゝにもみえ一みやこ人露を袖にかさねてうつ衣

題しらず

法皇御製

秋もなくうつろふ菊の花のよにしもの枝も又や着見

法印定為

うつろふもさかりをみする花なれは霜よおし田ね庭の白菊

山階入道左大臣家の十首哥に枯野菊

源兼氏朝臣

かきたてゝ田ねの枯野の山しほ雨色ゆしみえぬ紅葉し作

弘安元年百首哥奉し時

入道前太政大臣

かねてこにうつろふ色をみし秋のくれの枯野の紅葉に雨の降らむ

洞院摂政家の百首哥に紅葉

前大納言為家

ちるや雨る秋もすゑの山の山し時雨ふ紅葉を色さこそ深ね山路

同し心を

衣笠内大臣

秋しくれ日もしくる我は山端ぬいつくのもみちは色かはるらむ

山里に住侍けるに前関白太政大臣のもとより
問侍ける　　前大僧正慈圓
みせはやなとふこゝろある宿ならて紅葉のこゝろ染ても人の心ありけれ
かへし　　前関白太政大臣
もろくさわの紅葉の色のふかき染つくしもなき山のもみちは
題しらす　　前右近大将家教
立よらむ木の葉の陰の道もなし下葉色つく梢の山本
春宮権大夫兼季
朝ゆふに晴ゆく山の梢ちる紅葉の宿ゝもみちは
藤原泰宗
いくしほかしつの紅梢のもみちにも秋ふかき夕日かけのひかり
按察使實泰
梢の色ハ時雨もいとゝそめぬるを霜にしくれの秋の庭の錦せ
建保三年百首哥よみけるもみち[illegible]
後鳥羽院御製
おしなへて梢ハ末野の霜のうへにしくれみしころきつるくれ村
落葉の心を
院御製
秋月のすゝ野の下葛霜ハかつちる也梢そにほひとつ
[illegible]子門院
秋の月紅葉の日数も今ハいくつのころもすゝしの紅葉そのいろ

百首哥奉りし時九月盡

権大納言公經

こゆるね秋こそわかれめくれ命しお秋をさへをしみて尓几そ

源家清

秋の夕つゆ秋の(ゝ)すゝ秋のわさをとゝろ山風

清原宗秀

秋ぞとよふをかきりと思ふ身は秋の別れの夜はの枯

建仁元年五十首哥奉りける時

前中納言定家

むしにつけてもみのつの秋まてそかさねのうちに

くる秋は

新後撰和歌集巻第六

冬哥

初冬の心を

後京極摂政前太政大臣

ちりのこる岸乃雲間の梢ゆくへもさひしき冬はきにけり

後嵯峨院御製

かきくらし雲ゐもさえて時雨ゆく空はさなから冬やきぬらん

初冬時雨といふことを

天台座主道玄

けさは又冬やきぬると驚かれ袖よりさきの時雨ふる也

建保三年十月首人々に歌時雨

前中納言定家

時しらぬすまの関もる月やとしてこゝろも枕さそふ時雨つゝ

題しらす

前参議雅有

神無月しくれふりしてゝ鴫の羽色の袖にかゝるあめの足

大蔵卿隆博

わすれつゝかはかぬ袖のし神無月よその夕をしくれまそふ

民部卿資宣

今いそく花の梢もかれにけり昔も聞しまゝのしくれそ

前中納言為兼

山風にゆふよりふく雲のちれくもり雨しけのへは時雨ふる也

平時範

山風のさそふに雨のまくるる雲のつるねはうるも後時雨かな

式部卿久明親王

つもりける尾上の木葉はれて入日のよそにゆく時雨かな

朝落葉といふことを

中務卿宗尊親王

槙のやにいまたあけぬにをけるしもは時雨のこのはやよしの名残

冬の朝の中に

前権僧正教範

時雨をは板屋の閨に聞しかと雨そのやに冬る木の葉をそ後まちし

故屋落葉を

隆信朝臣

音にきく時雨もきかし古里の木の葉もちるや風のあらけれは

弘安元年百首歌よませける落葉

前大納言為家

散もせす後まへもしをまつなはあらしの末の木葉なりけり

歌しらす

丹波尚長朝臣

降かくす木の葉の下の水音に風はいくたひくるあられかな

法眼源承

正木ちる山の道はいつかよひにて木葉もかはらさるさと絶

藤原為相朝臣

槙にいのこほりふかくみる冬のその庭よりも木の葉の音は

建保四年百首哥奉りける時

光明峯寺入道前摂政左大臣

身の冬と成て人の心もしらるゝ木葉の霜の下道

残菊を

藤原隆祐朝臣

霜の後の籬にのこる菊の花ハ三めくりうつろふ色もみえぬ比ハ

左近中将師良

冬川のこほりもさえし霜枯の草葉に雨ハふる夜の音

前大納言良教

降つもりし梅の枝よりも春ちかくしか冬ごもりの何猶もおとしけし

今上御製

蘆の花ちりにし跡の冬の夜に霜の一夜の枝の冬ぞさびしき

左京大夫

霜こほる梅の枝の秋ならばそのまにやがて枯のこる冬草

弘長元年百首哥奉りける時

前大納言為家

いつとてもかる人めの山里ハ草の原にそ冬を待ける

冬哥の中に

中臣祐春

枯ゆくも惜き草葉にのこるらん冬を待らん人の外ハ猶やおくほ

右兵衛督實房

冬の夜ハ近ゆく野への夕暮に霜を吹しく風ぞさえける

建保五年内裏哥合に冬山霜

順徳院御製

冬鳴や外山の山かたにすさまし秋をみつゝ霜さゆるらん

後久我太政大臣

杉のこる木葉すくなき山風にいとひかねぬる霜の下草

光明峯寺入道前摂政太政大臣

よそにみるをちの山の霜もさむからしのはらにやとる冬のよなよな

題しらず

大江宗秀

梢をは雨ふりにもて冬の秋の霜にさらす嵐のおと

朝寒草にさらすを

後九条内大臣

朝霜のおれふしのわたりの雨そゝきむすふや袖の涙なりけり

冬哥の中に

左大臣經継

霜むすふ野への尾花は枯はてゝ我袖のみの月やとれる

正安元年百首哥奉りし時

入道前太政大臣

みな月よ雲も木葉もさそはれて嵐にのこる冬の月影

前大納言為家家人々よくにすゝめて日吉社にて

歌合し侍ける時関路冬月を

普光園入道前関白左大臣

清見かた関もる波にかりねしてよるとしもなき月影

豊明節会のあしたに

前関白太政大臣

君か代に思ひやつれてゆく豊のあかりの月の面影

文永百番歌合に

従二位家隆

天津袖かりの白雪にそしめをの雲のかよひちもむかふ哉

住吉社によみくたされける百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

明ぬるか月の出しほやみちぬらんすまの波ちよちかくなるかな

弘安元年百首歌たてまつりし時

入道二品親王性助

すまの関明かたちかき月影に浦のしほかせ千鳥鳴之

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

松陰やすまの浦の波によする波の月のこほりてよるの千鳥鳴音

千鳥そよるをしらせける

今上御製

きくのはま消てし清見かた氷かよふさよの千鳥

寛治百首歌よみ侍し時深夜千鳥

大宰権帥為経

立帰るしらぬひのるの浦風に夕波さむくちとり鳴なり

堀河院に百首歌たてまつりける時

権大納言公實

志賀の浦の松ふく風のさひしさに夕波ちとりたちゐ鳴なり

藤原顕仲朝臣

風さむみよるや更ぬらん志賀のしてよるなみの濱にちとる鳴なり

題しらず

従三位為継

さゆるよは堤のうら波立のへにあさりするにも鳴なる哉

家に五十首歌読ませける時読侍る

入道二品親王道助

わたの原漕出し舟の友なる八十嶋かくれ[illegible]思きこゆなり

建保五年内裏歌合に冬河風

光明峯寺入道前摂政左大臣

よし野川きよき流れもうちしらの山風に[illegible]流もしらいさて

冬歌の中に

前大僧正慈円

吉野川岩こすなみのおいつる滝川をのいりのよしみよ[illegible]

源邦長朝臣

を乃川のよしとも水のそらのまつにさらひきえてすゑ[illegible]

内裏に百首歌奉りし時氷結

右大弁宗資

さしわたす涙の流しるしてわたしにもやこれる山河

院に五十首歌めしける時河氷

従三位源親子

冬されハ嵐をさむみ山河のわたりもたえて氷しにけり

題しらす

永福門院

冬の川こほりの瀬々の波かはりこほりてゆく山川の氷

三十首歌めされし時河氷

院御製

冬川ハ氷のゆゑにとりあへぬ山のしたゆく鴨の羽音かな

嘉元年百首歌めされし時

法皇御製

あしの葉も床ならぬ枕さえてめぬ波よ雨の音にかゆく

題しらす

前参議教長

氷ゐる池の水鳥の掃入羽風やさえかへるの床にいつも

権大納言典侍

さしゐるそらの毛衣いつまでか霜もよなよなかさねつゝ

寒夜水鳥といふ事を

従三位氏久

さゆる夜ハ由し入江もあし鴨のさハのねくらや先こほるらん

道助法親王家の五十首歌に池氷る

前中納言定家

鳴らす山下のとよひも彼出し給ふ流るる池のこかねよ

霞を

前大納言為氏

浦人もよそにやみむつらし霞なかし雨の音の中川塩風

中務卿宗尊親王

ふるつりする人の消にいりたれて霞も袖のましみゆらん

建保五年内裏三首名所野霞

正三位知家

先するらちの草の枕もむちるりふゆるかるる秋も

名所三首よけるに

後久我太政大臣

あらそれるきさしよひしるる所枝すらるるのみのあかつきに

冬哥の中に

侍従為世

今朝の間にかかりかれ行あらしの山の峯の白雪

宝治元年百首歌めされしついでに

法皇御製

きえかけし都の花も風たてて山の南に雪はふりつつ

題しらず

入道親王道覚

ちるはまの庭も三山に降雪は積ればつもる花ぞ見えける

従三位隆教

をそは又松のみとしもうつりぬる遠山に入る山の白雪

前大僧正道瑜

あらしこそ吹こしも尾上はあらて我けさ雪にうもれぬる高砂の松

権大納言師重

よもすから降しく雪の朝かな色はねぶりもさめて

平宣時朝臣

いはの戸をたゝく人をも恨しよけさこそ我庭の白雪

従二位隆氏

いかにみける降雪に我庭こそ我思ふらし思ひ有らは

前大納言為氏

雨ふるよしや待て跡付けるは

雪の朝に待けりかりける

平親世

あすしらぬ日影の雪まきてぬ庭をみるやこの人のまちける

返し

前大納言為氏

みるやとて縁こそ思へいかなる日影の雪は跡を尋て

雪の朝性助法親王にをしにつかはしける

つかはしける

前関白左大臣

秋にきくけさのしらみけるしのゝに深さのひわか宿の白雪

従五位下おほまへより待ける夜深雪のふりしをよみ侍を

つかはしける

法皇御製

とまりあれは今宵もいかなる人も九重に待まさる白雪

依雪待人といふ事を

今上御製

跡つけぬ程そとみるも庭の雪人の心のふかくきこすもあり免しらす

右近中将光基

こゝろみても又ふみ人も絶りしましもの跡さへうつむ白雪

祐盛法師

冬の雪に往来の道もうつもれていくかになりぬ小野の里人

家六百番哥合に

後京極摂政前太政大臣

雪ふかき峯の朝けのいかならん槙の戸しらむ雪の光に

後九条内大臣家百首哥合に

前大納言良教

身にはつもる年を惜みて白雪の跡をよそにも思ひぬるかな

冬哥の中に

入道前太政大臣

かきわけていくへそ冬ふかき宇陀の野上の雪の明ほの

中務卿宗尊親王

わかならし山すそのゝわさらかなしも峯に雪のつもるらん

祝部忠長

出やらぬとまりくさゆる影の月のかけ山の峯の上の雪

性助法親王家五十首哥よみ侍ける時

津守国助

朝戸あけてみるをちけてはるかに山吹こす風に山もる白雪

續拾遺集奏覧の日雪のふりて侍けれは
前大納言為氏のもとにつかはしける

前関白左大臣

和哥のうらに降りし雪もふるき跡にかさねていまみゆらめ

返し

前大納言雅言

君か代やよる浪風もしつかにて白雪の又かすかにみし淡路嶋山

雪持のこゝろをよみ侍ける

土御門院御製

あらしもや枯れしぬ実に雪ちりてこゝろの末にいつる時人

千五百番哥合に　二条院讃岐

降雪に人こそとはね炭竈の煙はたえぬ大原の里

冬哥の中に

春宮権大夫兼季

山人のすみやくならし雪ふかき谷川みちへはたえて煙たつらむ

京極

暮ぬとて今はかへることし年の道ふかくせよみの白雪

法印長舜

身につもるあはれはけふこそ思ひしれゆく年の年の暮かな

性助法親王家の五十首哥中に

入道前太政大臣

思ひすく月日の程も今更に思ひしられて年そ暮ぬる

仁治元年百首哥よみ侍けるに歳暮

前大納言為家

六十あまりをくるも思へは身のうへに又ゆつりける年の暮かな

新後撰和歌集巻第七

離別哥

題しらす

後嵯峨院御製

人ことにゆくもとまるもなけくらん人やわかれのならひなるらむ

藤原仲実朝臣越中守にて下りけるにつかはしける

基俊

君のゆくこしのみにし思ふこともあまたのこゝろなれは山雲なへたてそ

東にまかりける人に

前中納言定家

ゆく人の又あふ坂の関守よ向の松をたのやまちなん

題し

蓮生法師

逢坂乃関よりも杉よ雨のもてゝしるしとそ見よ向のしるしをは(ちきり)

題しらず　　隆信朝臣

ちきりこし末をたのみて帰る人のまつ(?)ものを侍るを

前大僧正隆弁三月(やよひ)のついたち毎日東(あつま)へ帰り侍る

遣けるによりつかはしける

中務卿宗尊親王

いかにせん帰らぬ春の別まてをしきは人の名残なは(をと)

返し　　前大僧正隆弁

めくりあはむ程をも待たて帰りけれはわかの都の春の別を

このたひは所へ帰りけりたに(さ)人の名こそおしみ

遣けれは　　よみ人しらず

思ひやれ老てふる身の世の別路はこれを限と見えぬいのちそ

わりなくも月の比より雨の降ける時藤原為顕かり

再逢(ふたゝひ)遠くのかへさにまかりぬるときも為しこ契りて

遣けるまゝにまかりけれはつかはしける

清原国助

あすしらぬ世乃命のうちの道をまてまちとそ思ふ我こそいひ越え

返し　　藤原為顕

契あらはめくり逢ふやとまつ世の命(の)のうちぬるはゝてにけら

題しらず　　従三位忠兼

おもへともなほそむかれぬ世の中にいくとせ花の名をや惜しまむ

よみ人しらす

なつのころ文なとつかはしける所の命によりてわかれを惜侍

こゝろさし所へ歌のつかはしける人に

前大納言實兼

いはしらていとはしきこそ悲しけれ我身も人の心なりけれ

静仁法親王の兄弟子に(こと)つけゝる返り

ゆかりとてゆかしくてよみつかはしける

前権僧正教範

そむきはてし世をいとふ道なれはまよはぬものと思ひなるそ袖ぬるゝ

題し

静仁法親王

立帰りなれし都をあこかれて春のよそなる袖は思ふかな

我か京綴る野山の雨のくもりける(つゝて)住(すみ)江の月

みけのまゝなし出(いて)川の入日とて

津守国助

月のみそむかしの人やおもふらん我をさそへしみやこなりけり

わけまよふこゝろへゆきけるよはいかりける

高弁上人

都にはまた思はしと(あつま)のそらいくへかすみの家の白雲

題しらす

大蔵卿隆博

様くつもよろよるわけはにしらくらも浮し中にくつてゆかぬ

あつまへくたりける人につかはしける
このたびはたえしもゆつそつまをいつくの山のすゑをしもしらし

祖意法師

久安百首哥に　　　前参議教長

かへりこん程はいつのけしき契ぬるもなかのちぎりはいつかし　　別の哀を

前大納言忠教

ゆかん世のちりのをきを思ひすてにしよもしらて人は契つらん　　かへるへし

暁別しなけける月影の都にゆかんのゆかんかな

西行法師

かへりゆく人の哀を思ふにもおもかげそよはやこえゆきてし

新後撰和歌集巻第八

羇旅哥

白河殿七百首哥に暁越関といふことを

前大納言為家

鳥の音に関の戸出る旅人をやまた夜ふかしとおくる月影

題しらす　よみ人しらす

あつまちやしらの里に関据てよそにこゆるさやの中山

熊野にまうてさせ給ける道にて三首哥講せられけるついてに

後鳥羽院御製

鐘のをとも聞へぬ旅の山路には明行空を月にしるかな

旅の心を　順徳院御製

すゝかのやまゆくも旅衣かたしきしとに山の下露

後嵯峨院御製

見ぬ方をはるかにみる山の峯はるかに雲の波をこえて行かな

前中納言定家

かつらきやみねの雨のふらぬ日はくもりはつるさへ白雲

熊野にまうてゝ侍けるによみ侍ける

白河院御製

山のはにたちゐる雲をわけすきて旅の衣も色はまさりけり

題しらす　従三位頼基

擣衣しくれにくもる夕暮に雲にゆかるゝわたりつゝ衣

衣笠内大臣

やまみちにかねもしは成まておきこしのわきこし家の白毛

平貞時朝臣

擣衣つる朝川山のさねおろして雲のいくへそ袖にあるらん

あしにはけるは中務卿宗尊親王の百首よ中

川りしける　参河

思ひやれいくへの雲のへたてそこともしらねわれやあはれと

旅宿　中務卿宗尊親王

うくりふ雲のへたてゝかりし思ひありけんこゝろきよ待

擣衣の声の中に　前大納言為家

古里を思ひいりとも夜をへてそすむ山のはの月

大蔵卿隆博

ふる里も出し都のおもかけを月にうつしてさしよそれ

よみ人しらす

都思ふなみたもとほらて擣衣きぬれは袖の月影

月のかけつけゝる鏡の山をこゆとてよみける

前参議雅有

立わかれ月まてみゆらしみちのへの都のよその面かけ

擣衣の声とよみる

藤原景綱

あくかるゝ山路の月のいるやまに里ゆくゆかしよい更ぬとも

八月十五夜十首歌よみし時旅情

津守国助

月にゆくほのくらき山の旅ねよい宿かりてさそへてもさ野やの

前参議雅有家三首会に旅宿月

寂蓮法師

月みれは旅ねの床もつゆなれて露のことむすふ草のまくらか

天台座主道玄日吉社にて人々にすゝめ侍り

ける廿一首の中に

普光園入道前関白左大臣

都にてみし面影のつきけり草の枕のありあけの月

旅宿を　後九条内大臣

さらぬたに秋の草葉を結ひしてゆふ枕にのこる白露

長月の比東へくたりける人のかたより申

遣しける　従三位氏久

旅ころも今はよそにもゆふ風に旅ねの床を思ひこそやれ

みちの国にまかりくたりけるに

詠しを　藤原教純女

名にし負ふ吹こし関の旅風の秋にかはれるすまの関

旅哥の中に　法印定禅

暮わたる下道ならはいくかへる花やまさゆる梅の旅人

正三位頼資

色きにし山の衣かりしやとてすゝ野の露よなにやまかせし

藤原範宗朝臣

こよひくさまくらの袖の露なるらんわすれやすらん月の山居

正治百首歌に

皇太后宮大夫俊成

旅衣しくれし秋の道ゆけはかれても旅宿ゆかしさよ（夜）の中山

影しけり

衣笠内大臣

わひ衣夕風さむしさゝ（く）篠の葉のさやの中山あらし吹らん

性助法親王家（の）五十首歌に旅

法眼源承

古郷をいくよへたてゝ草枕夢にしたはれきぬる

思ふ人を

平時久

草枕むすふともなき夢をさへになさまし風の吹かよひ路

前中納言定家

古郷をおもひし雨のさよ更てあはれしの枕夢にわかれぬ

宝治元年十首歌合に旅宿風

山階入道左大臣

いくよわれしくらひね旅衣うきおもし山の峯のあらしよ

（やとい）三月のさゝら浪の田あさり雨にかけたる道のまく

よみ侍ける

思ひとく文古のむかしのみちも氣のさらもりる我山のいはねも

題しらす　　　　源清兼

横雲ハ峯にわかれてわか坂の関路の鳥にさそはれつゝ

百首歌よみ侍ける時　　　　前中納言有房

清見かた磯山けしきゆくくれて人こそ関にとゝめかねけれ

名所百首歌よみ侍ける時　　　　僧正行意

さえわたる人はよも月もゆるさすは清見か関の月をみましや

題しらす　　　　後京朝來

うちよするにかもの袖を清見かたきりわけゆける波の関もる

院大納言典侍

きよみかたうら風さえて夜ふかくもゆくさきの流の関守

前大納言為氏

清見かたうら出てみれはいそのへの雲にはいはし波しけの山のは

藤原為相朝臣

名高き富士の山の雪を見すて浦ちかき関様に

[illegible]

[illegible]　清誉

みやこ鳥いく代の世にすみ川ゆくての人まちのまこと我

海路を　　　　中務卿宗尊親王

人のくにゝ旅にまかりけるに風よはらていかなとまる人

内裏に百首哥よまし時旅泊

前中納言俊定

吹まよふ風のまにまに上りてはなけのみなとにわかれて出る舟人

旅の哥の中に

前大納言資季

こき出る島はいくへにちかの浦の波のつゝくつゝく雲そかゝりける

心海上人

さすらへの身のゆくへにゆくかたしらて月の舟の跡をしるらん

後法性寺入道前関白太政大臣家に

百首の哥よみ侍けるに旅の心をよみ侍りける

後徳大寺左大臣

住吉の松の見えぬをしるへにて白浪はるかに見れは

題しらす

順徳院御製

わかの浦やなれしむかしのゆめのよはいまもおきつのしほ風

旅ねするやとのあはれを身にそしむ

長月の頃よみ侍る　如願法師

都いてゝいくよの波のうき枕なれてもうしやあすの舟路

旅人を

平親清女妹

たのめおく人もありけり我もまたいつかはこえむ山路なりとも

あつまの国に侍ける時　中納言雅忠

かしこにつかはしける　藤原忠賢朝臣

思ひやる心ハ我し都なる人のこゝろもまたかよふらし

返し　　権中納言公雄

あしたハ都の雲の人ちかくきこゆる風つゝ春のよの夢

帰朝の後月をみて大唐にて見し月を思ひ出て

よみ侍ける　　志喜上人

故郷の都をおもひしよな月又むかしのかげにみえける

返し　　よみ人しらず

きしかたに鳥の声なく草枕すみこし都こそいとしくは

百首歌よみ侍ける中に

光明峯寺入道摂政太政大臣

きのふつくみ川の小嶋の人ともなし都とつたふへつら

みやこ恋しき

新後撰和歌集巻第九

釈教哥

法華経方便品具智恵門難解難入之心を

皇太后宮大夫俊成

入かたくさとりかたしといふ門をおしひらく花の法にそありける

譬喩品

前大納言経任

子を思ふ親のをしへぬる車をはいかなるのりのやとりにゆきしはかなき

今得無漏無上大果

了然上人

鷲の山雲まのよそにみしこえて又この上もなきこそ見つる

授記品

後嵯峨院少将

更ゆきをいはん月と同しくいにしへのくまもはれゆく時めくらん

法印公紹

やすらひし世々の便と浅草の露のかりやとやすき袖に

化城喩品

澄世法師

かりそめの宿としりてなかなかにしはしはそこにやすらふそうき

五百弟子品

前大納言道覚
前大僧正道覚

下にすみしもしのゝをしらてわれは小野中の清水を草のねにそ

以無価宝珠繋著内衣裏

法印実雅

尋しわか衣のうちの玉さへにはなれていまそしらるゝ縁

前大僧正[illegible]る

衣手につゝみし玉のありかをはわすれてうしゝ人にみせつゝそ

須臾聞之即得究竟

前大僧正[illegible]澄

一すちにきゝてそしるを執とすへくはなれぬ[illegible]すみゝは[illegible]

寂寞無人声讀誦此經典

皇太后宮大夫俊成

同人のわしるふく葉のいろもかはらしとしくる月の光をそまつ

乃至以身而為床座

源有長朝臣

仙人のおしへ山してすゞそこくいのちにゝあさをとふ[illegible]

不信是經則為大失

忠俊朝臣

わかみの内我ならてみゆるとも心の中はしらせぬる哉

不断不[illegible]

法印源季

草枕葉のわたしのうたのかきりの月の光のまたも来

於力不

俊頼朝臣

あさかみのつとめにはやとかくのみかけし雲かくれの月をみるかな

於我滅度後應受持此經

前大納言忠良

あらさらん後の世まてしそこそうきにつまさる我か心なれ

是人於佛道決定無有疑

八條院高倉

契をくそのりの末の我とあらは此世をのみと何かなけゝん

囑累品

寂蓮法師

つたへおくしのひくも御山にしけみのりにしらぬ世ゝにとまれ

若為大水所漂稱其名号即得淺處

従三位忠成

おほ水のなかにしつむ我たにも門をたてゝもなかれあつさりたすかる

観普賢経見諸障外事

源兼氏朝臣

秋の夜の霧や空に晴ぬらんおなしおもひの月のさやけさ

中務卿宗尊親王

同経の心を

春霞たちてさへとは雨そゝきけり納めにしむりの山の桜く

安嘉門院大弐

題しらす

世をすてゝこのはるの花をみしうき時の契ゆるやかに

天台乃法門の枝葉にかゝりける末代ときも成ぬる

末を思ふるもよみける

前大僧正慈源

ちらしけむ妙なる法の花ゆへに光をそふる月をこそ思へ

釈教の心を　　前大僧正経忠

鷲の山後の春こそ頼まるれ人のむかしの名をしめして

題しらす　　今上天皇

鷲の嶺やさらぬ別の月清きかたこそ人をさそふなれ

家に花五十首の歌よみ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

わしの山法の庭にちる花をよし野の峯の風やさそはむ

久安百首歌に　　皇后宮大夫俊成

いりにけむ鷲の高根の月かけに思ひいるこそ哀なりけれ

二月十五日の夜湛空上人身まかりける

西音法師

二月のまなかのよゐの月入にしあとのやみそかなしき

返し　　湛空上人

鷲の嶺をいぬる後のみのりに帰るをしけり春なかはの月は入にき

文永七年冬の比内裏にて人々のうへに如法仏眼の法修しおはしけるか雪の降て侍けれは家元のむしろの絵を思ひ出てさまさま

侍ける　　天台座主道玄

かきりにもをしく雪はふりしくのにしへの法の庭のみちしるへかな

灌頂　　法皇御製

いにしへの跡をしるしてつたへ来る心のまゝにかよふ成らむ

正安二年法皇に灌頂さづけ奉りて後つかはしける

よろこびの給ひける事を思ひやりてよみ侍ける

前大僧正道什

思ひきや我立杣のひはあらで雨我身に法のこすべしとは

大日経を

前中納言為藤

きみしにみえぬもみえぬもしるしいのちひなき

理趣経欲無戯論性故瞋無戯論性

前僧正公朝

をしへおくことはのまゝにあらはにみえける草木の草木のかずもみな道

父母所生身即證大覚位の心を

法印定源

法ゆへは悟りひらけて文字をうけて又ひとつまことにはよそのみち

即自然覚不由他悟

よみ人しらず

われもこれもしくこころみな法の道人の心をさとるへの道

密厳世界

前大僧正隆弁

何ひとしく到し国をとらへつゝ秘蔵の道のおくそゆかしと

清法のいつはりなくに思ひいりてを給ける

前大僧正公什

おしなへて法の道こそあまたあれはなをわきて一すちしれやかなしき

一流の末をうけて法をつけける

権少僧都道順

夏草のしけき世にわけいりてたちまよふともつたへこし古の道

弘安元年百首哥奉りし時

二品法親王覚助

あきとてもわかぬ月は雲もなくいつのほとけもしのけふをまつとこそしれ

百首哥めされしついてに 松枝

今上天皇

ましてこよひ八月の月のなかにこそすれる宮の梅か枝

読しらす

後一条入道前関白左大臣

雨はれてみちをちりつゝ出すまたすみのほるよそのくものいたゝきの月影

後京極摂政前太政大臣

さよの更ゆく月をみるにもちかひゆくみちをとふ人の竹をとも

月のうつろひける夜あけて法師のもとにつかはしくきえは

けふに出家の心さしあるよしゆふくつましく

ゆかりける後ののちのあはれ成りしよの空も

中院入道右大臣

申をくるとして

夜もすから月を見つゝそ明しつるこのよにしもこゝろのはれて

みる

題しらす　　西行法師

すむとみし心の月しあらはれは此よも晴ぬもはれさらめやは

心月輪の心を　　小侍従

いさきよく月はなをすむかしこきはこゝろのやみをてらす哉

前大僧正行慶

くもりなき心の月の晴ぬれは静にすめる月をみるかな

蓮生法師松嶋へ罷くたりし法門をとひて

ゆめのうけるまゝにのりしける

見佛上人

あまる夜乃圓頓にあまりすさめる心をそ思ふ

題しらす　　蓮生法師

やみちにはゆくしひかりとなれ有明の月まつ程の人のこゝろに

義稜門院極楽六時讃をよみけるに

かくつゝむ心のうちにしけるに七重寶樹の風には一實相の理をとくらん

皇太后宮大夫俊成

はなきよる七重の人のうへにこそ寂しきこゝろもそら

無量寿経中八相の心をよみ侍けるに関名其

従弟　　権少僧都俊誉

よし野川花の色波あにそてしらす数きのこゝろにこそ

真是諸相形　中原師光朝臣

三千あまり二のすかたもあらはれはいつれも仏の花の面影

觸光柔軟　祝部成賢

身をてらす日吉の影をうつしてそ此世からこそやはらきぬれ

観無量寿経正坐西向諦観於日といふ事を　源邦長朝臣

西にのみこゝろの空を入日かけに人のうつりてやはする

氷想観　蓮生法師

みつきよくいつもこほりてたゝ人のこゝろにみゆるめくらし

光明遍照十方世界の心を

大江頼重

草乃原露のゆかりのこゝろにそ月もかはらて影やとしける

釈教言の中に　大蔵卿隆博

立帰る文字よりまさに世にゆかりものちのひかりなりけれ

是心是仏の心を　常盤井入道前太政大臣

今さらに仏のみちをいつこにかもとの心のほかにもとめん

下草観をよみ侍りける　後嵯峨院御製

とこつかする日ぬ露のいのちをいきてもちらすの玉しかるらん

普門會

いにしへのちかひしそれもわれら人の為しハわしくハ我よみを

阿弥陀経讃歎流文の心を

天台座主道玄

うれしさをはるゝ袖につゝむかわらくこゝろの月をやどして

三輩一向専念無量寿仏

慈證法師

みよし野のこゝろを山の滝川も末ハ一つのなかれなるらむ

一切善悪凡夫得生者

権少僧都房厳

故郷へかへるとみしの山風にみなさそハれてゆく末の花

権教の心を

禅空上人

一すぢにおもひかゝる白糸もくるしきすがたに乱れすもがな

阿弥陀経を

式子内親王

春の日にすむ人の為ハおほくとも花にしめを花のまにまに

仏名を思ふうれしさハいまこそ君がみにハもとやと

此心ハ禅林寺経蔵に律師永観か心を

みける

人のまよひにわれしへて行道をしるへしるへとして

ほけれハ

蓮生法師

思ひいるゝ人のこゝろもとまるへき君しハ此の和尚のこゝろざきを

かなしき事侍りける人に

順空上人

ねにやつかしこにいかなる道はあれと我へもとはゝこたへよ

詠しける　基俊

すみのほる月のひかりをさそへ入て西へていかくわかちるゝ

往生礼讃に西有事礙不及向西方但作向

西想亦得といふ事を

法眼能信

夕暮の山ねを出る月影も入へきことをわすれやはする

弥勒を

唯教法師

めくりあはん我身はいつとしらねとも嶋の月はいはしこそ

天王寺にまうてゝよみ侍ける

後京極摂政前太政大臣

西を思ふ心ひとつをつてにては国の難波わたりはいる入のみける

同しく所々の名を人々よみ侍けるに

亀井

郁芳門院安芸

西れよこく清の流をくみてみれはにあつる亀の命

久安百首に釈教

大炊御門右大臣

世中をいとふわすれつ鳥の音も聞しれ山の中もしらすも

合會有別離の心を

前大僧正慈鎮

あひみしにあへハ別れのかなしさをみてや鹿の妻をこふらん

般若寺の中にて　寂蓮法師

色もかもむなしとときし有をもなくしておもひける哉

金剛般若經不應取法不應取非法

法印宗円

よし野山さくてみちへつる花も雲も桜も春風そふく

我於阿耨多羅三藐三菩提乃至無有小法

普光園入道前関白左大臣

是ならにかしこき法の一くしも思ひしらする袖のうへかな

最勝王經吉祥天女品の心を

皇太后宮大夫俊成女

ちりはてし月の都の人は袖にみけるさとをすみさら

因是始終知死生本來成佛生死涅槃猶

如昨夢之心を　前太政大臣

さめてみしゆめの世の中はかなしとさめしはさめぬ夢なりけり

欲知過去因見其現在果を

法印円勇

報いまなたれける身のしらにあやの世のつらさこそ

往生無退転初度　参議雅経

もろ人のまよふうき川の橋柱ながくしらぬ人もなし

以観々昏即昏而朗

前大僧正忠源

山の端に雲にかくるる月はなほしばしもやみてありけるものをとぞ見る

大日経三々昧耶不現般涅槃成就衆生

寂然上人

雨よりも雲入やしみゆる月もかはらずにのちのけさよるよりは

仏変嫁九月後慈姫入天台之以人之を

寂然法師

もろ人乃有明の月ぞともろ共に入ける光を思ひこそやれ

迷悟一如の心を　僧正範宴

さとりつる道ならくにかくなほしけれとこそも同じひかりなれ

一念不生　心海上人

草のもとに虫の声はなきさるるの白露はなかれたりけり

堀川院の御時百首の歌奉りける時

基俊

うき世にはきてなばいつまで蓮葉にやすらふ露の光こそあはれ

煩悩即菩提の心を

今出川院近衛

思ふことや神にはかりし道をも夜のうちにかくる到しえ

題しらす　見性法師

雲のうへもみえぬはれぬ法の雨しるをいくよすかへりしこゝろあらめや

五戒の中に不妄語戒　惟宗忠景

法のためあらはしと思ふこそうれしきかな法の雨しやぬれ

将義の心を　花山院内大臣

むかしの道あまよふと思ふこころそなへてはしるへもあけれ

前大納言兼良

いにしへの法の光もきえてぬ月かゝる海にすへてきけれん

円位上人

わか思ふ人こそけふはよもすからまつ世の後をまつらむ

厭離穢土の心を　前大僧正慈鎮

みな人のさりぬ別を思ふこそうき世をいとふつまにてもあれ

題しらす　僧正道円

もとは雨よふ事もひとまつよりかへりをもしあはれ人こそなほ

慈道法親王

さしてこそかくしかもしるへこそまよひそめ見えりしめるらめ

百首歌よみ侍る時釈教　前内大臣実

あしこき人の心よりいつこともすむ思ひやむつこ清のみなと

同し心を　前参議成光

我にあるこゝろ清の水ならは清からむ我おもひつゝをしつめてとまるへき

権中納言□雄

あさりくいなの花をほく清の水のみなみうちにいきもえし

数山乃谷にありしひ人の行る清門のすかけり

人の心ことに

前大僧正□澄

清の水詞もいなの花をはすくしてて人しよまうちゆく

唯識論乃由此有情流転及涅槃證的の心を

権少僧都良信

こゝろしも同し心の水なれは又うつらさくる春よあかまいし

如清水雖純清濁の心を

法印実聡

すみあかしもしの心の清き水にうつもとてね玉の井の水

題しらす

権少僧都実寿

よもすから定たえすつけてもみる道にきりあまこに

かよふ法仏の前よりつみひて思ひいてを法

ける

平親清女妹

あくへきよつくやみうつにあかよしもあひつくる清き燈

将及の舟 ゆきてくく

澄覚法親王

いにしへの神代をみてこそうけてもれにくるゝ

清のこと女史

新後撰和歌集巻第十

神祇歌

百首哥めされし次に神祇

太上天皇

ちはやふる七代五代の神世よりそ我わか國は神のまもれる

題しらす

二品法親王覚助

神まして秋月すむ空の五十鈴川わきて清き流の末

よみ人しらす

神路山しめ縄の一すちにたのむ心は此世のみかは

法印円延

榊とるやまのしづくにかゝる月いのるこゝろのかはらぬ人
大中臣定忠朝臣

すゑながくわがきみが代をいのるかなかはらぬ秋の月をみるにも
度會行忠

くもりなきあまてる秋の月かげは昔も今にかはりやはする
よみ人しらず

君の代をいのるはある秋ちらぬ月かげのひかりにぞしる
嘉元百首歌めしけるついでに　宮祐親

後宇多院御製
石清水きよくなかれてをとこ山さして秋の月ぞひかりもくもりなし

神祇の心を　院御製
石清水ながれにうつしみれば我が国の秋はうるはしくこそ
天台座主道玄
ちはやぶる神のみかげの中におはしますをしるこそ月のさやけさ
前大僧正禅助
すみなれし昔を秋もしのびつゝいのりし末もしるし
百首歌よませ給うける時神祇
後鳥羽院御製
ちはやぶる神やうけけむあまつかぜかけてぞ月の影もさやけき
月の心を　[illegible]天皇

名にしおふふちなみしるく杉の尾の秋のちかひは末の世のため

前中納言定家祖父中納言俊忠春日社行
幸の賞によりて従三位に叙し給ける朝
門にまいりける　　前参議雅経

秋もへるきみしめしや春日山みとりの松の色知ぬらん

返し　　前中納言定家

うれしさもむかしにかへる道をへてみかさのみちのしるしとそ見る

神祇の哥の中に　　前太政大臣

曇りけさ空晴わたる春日野の神しろしめす家の末々

中納言家成家の哥合に祝　　藤原道経

三笠山みねの小松を君か代の世のためしとや秋やしるらん

題しらす　　永福門院

天のとをおしあけかたのみかさ山みねにもすめる秋のよの月

後一条入道前関白左大臣

神の文字に秋をやかはしてちかひける春日のちかひたのむはかりそ

春日社に詣して読侍ける　　民部卿資宣

ふりにしをまつわか秋のちきりをもかはらぬ秋やみかさのみや

中務卿宗尊親王家百首哥に

前右兵衛督為定

まつか山たつね秋代はきけれと松ふく風は音をそうらく

神祇の心を　　中務卿宗尊親王

住吉のうしろの松のかみさひて久しの代ゝや秋をへぬらん

従二位頼数住吉社にて歌合しはへりけるに

前右兵衛督為教

秋のくるや松のみとりにさそへてむかしにさける花の玉ゆら

久安百首歌に　　皇太后宮大夫俊成

いくかへり波のしらゆふかけつらん神さひまさる住吉の松

題しらす　　前大納言経任

住吉の浦の松かをへつゝ神さひわたる風の音かな

前大納言為氏住吉社にて歌合しはへりけるに

社頭松を　　法眼慶融

君か代のかけてそ祈る神垣におひそふ松のしけるゆくすゑ

住吉社によみてたてまつりける百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

和哥の浦の道をはすてぬ神なれはあはれをかけよ住吉の浪

神祇歌の中に　　津守国助

敷島の道あらはける神そしらしつゝ神垣に思ふかひある

廣田社哥合に述懐

権大納言実国

天くたる神のめくみのちかひにはわかき星にも徳のかけ哉

久安百首哥に

皇太后宮大夫俊成

思ふ事みしまの神にいのりては杖にかゝれるちかひのこゑ

詠し侍

前大納言為氏

さゝ波や神代の松のちぬまくに昔をかけてのこる風そふく

宝治百首哥よみ侍ける時浦祝

祝部成茂

幸あるやきみかゝる浦ましに漕ゆる神の御舟の跡をしるよし

詠し侍

天台座主道玄

くもりなき世をてらさむちかひにや日吉の宮の跡をたれけん

祝部成茂

あひにあひて日吉の宮そさかゆへき七の星をてらす光に

日吉社によみてたてまつりける哥の中に

前大僧正慈鎮

たのもしなもらす人やなかるらむ日吉のかけにてらされし身は

詠し侍

法眼源兼

くもりなき神のこゝろのかゝみにて鏡の山のみねの月

祝部国長

榊葉や千年わかまつの林に霜をかさねて世をそ祈る

祝部成賢

秋のたにかりの庵のゆふかけて祈さへこそ露の稲葉

日吉社に百首歌よみてたてまつりけるに皇后
宮大夫俊成にもよみてまゐらすへきよし申
ありけれはよみてつかはしける

前大僧正慈鎮

いそのかみふるき心をならへとて神よりちかひし日吉の花
ぬし

皇后宮大夫俊成

昔よりちかひのありけるをたのむへくしのちの
代

神祇の哥の中に

祝部忠成

よろつよと家のしるしの榊葉は秋も色そへてみつかき

日吉社によみてたてまつりける

前大僧正公澄

祈こし秋よりのちはたのもしな人よりさきにめくみ有神

人々すゝめて玉津嶋社歌合し侍ける
に祈述懐を

前大納言為家

祈こしかしのちの代を忘れすは昔にかへれわかの浦波

前大納言為氏

神代より我国守る縄よりの人しいつまてまもらし
も

題しらす　　祝部行氏

年をへていのるこゝろをたのみし神の道あらは代々に我もあはれとは

鎌倉右大臣

みつかきの久しき世よりゆふたすきかけし心は神そしるらん

今上天皇

みるや猶秋もさかりとやかてきくしも人思ふ梅のよの月

五百番歌合に　　前中納言定家

さかきはにて秋よりの夜の鏡こそ光かはらぬいのりをはみつけれ

野宮左大臣

秋葉に光のさしてゆふかけて影す秋の日山の神をあふくそ

神祇を　　鴨祐世

まへね三宝の神年をへて仰しきは世を祈らん

祝部成久

秋のよにおもふことをゆふたすきかくのみもひくにいそて祈らん

平時村朝臣

祈る秋の秋は我代をもちらしみかは文祝をしをりてこそ

賀茂重保社歌合しはけるに述懐の心を

皇太后宮大夫俊成

さゆみ捨てしまゝもいのることを思ふ道は我もえこそ

弘安元年百首歌奉りし時に

法皇御製

すてゝ乃秋のみしるをかきてしらはやつるゝは世を思ふ

熊野に向ひつゝをなけける身よりをなけける

後鳥羽院御製

世をてらす熊野を思へは熊野山人の心をるに

十月三日月のころ

新後撰和謌集巻第十一

恋歌一

弘安元年百首歌よみし時

入道前太政大臣

人しれす思ひ入野の花すゝきみたれそめける袖の露かな

弘安元年百首歌よみし時初恋

前大納言為氏

いつよりかしけるをさゝの露ならて先袖ぬらす我涙かな

後法性寺入道前関白家百首歌に忍恋を

隆信朝臣

さとこそは雨ゆゑ志のふなる思ひかけ月より雨はいかなる時

題しらす

右近中将具氏

けふよりはいつれにむすふこの秋の人もまつらむ思ひかねつゝ

前大納言為家

しら露はたまにぬきてやさゝ小野の小野の草葉しらぬにも似た

正三位知家

しるやいかにいつもこの秋のしのふ思ひ人はいかにいふともしも

藤原重経

しら露はおくの風こそ木萩のかにいひ千ゝに思ひ乱るれは

藤原為経朝臣

かのかたや難波のあしはいつくなれはこれる方もはたよしとこそ

寄煙忍恋の心を

鷹司院按察

しるましみ思ひはわかれこゝろの下の煙ならは知人もなし

恋の歌の中に

式子内親王

しのふるもやかつはよしみるもつらき身にのみ我心そ

後法性寺入道前関白家の百首歌に恋志

隆信朝臣

あはれとも誰かは忍ふなくさめむ身よりつまよは知人とは

題しらす

鴨長明

うき身をはゆめぬなけるにやも哀てあや思ふそ同人と身

大炊御門右大臣

恋わひくなけの袖よ出ぬへしあかすもさてもわれならぬものとなる

従二位兼行

ひとしれすやさてもわれは中にあるへしと心ありけるのをもちるまい

後嵯峨院大納言典侍

人しれす思ふ人のつらさをも身にしらぬやはさてもさる命

平政村朝臣

恋こそはそのかよひにみえすともとはれぬ袖を人やとかめん

院大納言典侍

ききつへしをこふる袖は年をへて人めにしのふ泪なりけり

前中納言定房

下にのみ忍ふの水の山をこえつゝもれてこそ袖のぬれける

後京極摂政家六百番歌合に

大蔵卿有家

名にしおふる音羽の滝も忍ふの関よりも袖はぬらしつる

名所百首歌よみ侍ける時

前中納言定家

春霞かすみの浦をこく舟のよそにもみえぬ人を恋ける

大僧正行意

名取川のうき名も袖にきてなかくいつまて桂の瀬々の泊哉

忍恋の心を　土御門院御製

我恋はいつしかの森の下草のしられてのちもすくすなる

前関白左大臣

しられしとしのひてもおもひの杜の下露に涙の袖はよみやすは

祝部成茂

下にこそおもふ恋のみつからし袖の色にはいてゝかはこそ

宝治百首歌よみける時寄衣恋　常盤井入道前太政大臣

色みえぬ我や思ひのすまてなく衣思ひしらすは袖のしつる恋

題しらす　後嵯峨院御製

人のこゝろをまつしられぬるわれなりていく年月を思ひわたらむ

前大納言為家

みちのくのこゝろは我てすれる摺衣みたれそめにし門なへ人にしる迄

建長三年九月十三夜十首歌合に寄煙

忍恋　前大納言資季

命のをはりの煙もつゐには空にみえぬ思ひの色に人しれすは

後九条内大臣

浦風になひくしもの煙なひくこともしつかなる人にしてくいるゝとも

前右兵衛督為教

わかのうらの浦わしかやの夕煙思ひこかれても人にしつるな

千五百番歌合に　大蔵卿有家

かゝるやの煙はたてゝ下にしもへでも思ひわたることは人にしらせじ

恋の歌の中に　従三位親子

我のみこゝろ知る煙の立てもまた人はやかくや思ひ来し

院に三十首歌奉りし時不逢恋

入道前太政大臣

あふ事はなきもありしも夕煙たなびく中に恋はしぬとも

読人しらず

いかにせん思ふまゝに命過ぎて後のうき名のまたもかからば

後京極摂政家の六百番歌合に

大蔵卿有家

思ひいりし世はいとゞまだ思ふまゝ君がためにやかへし橋

恋の歌とて　祝部成良

いかにせん袖に人めをつゝむとも思ふもあまたまけいてゝなき

今出河院近衛

思ひもしらぬ人をこひつゝ袖ぬらし我身さへこそひとつになりぬれ

寛治百首歌よみける時寄橋恋

少将内侍

いはまの影の橋わたり我ちかひし人めよとゞめて恋をしのばん

尚侍藤原現子朝臣家歌合に寄恋

内大臣

よしさらは涙ゆるさてこそ人はいはつる袖なれは

題しらす　　院御製

みをしるやなくさめかねて思ふ涙こそもとよりしらする袖を

西園寺入道前太政大臣

人しれす思ひの色の下そめにしほるゝ涙の袖をみせはや

法皇御製

くれなゐの涙の色もはしめより袖にうつりてかはる [illegible]

住吉の社によみてたてまつりける百首歌の中に

皇太后宮大夫俊成

萩の野の萩かしたはに露ふかみ人は思ひのほかにみ

思ふ人をよそにのみしてなかめける

村上天皇

さかの野への秋のなかめにたくひなき露やみたるゝ

寶治百首歌の中に　前大納言為家

おもひねのよはの夢路もさめやらて滝のなかれにたえすも

弘安元年百首歌奉りける時

前大納言為氏

かきくらしなみたの池のにこる身にかゝる

寶治百首歌奉りける時　従三位…

山階入道左大臣

きこしのぬれし君か袖のみなれしは今はしのぬれなきをたてまし

津守国助女

恋の哥の中に

埋木のさてやくちなん名とり川わたる袖ハ涙にそぬる

よみ人しらす

かくれぬの入江におふるあしのねのねのみなかれてすくる絶

澄覚法親王

みくさゐる板井の清水いはねともいはぬを汲てしる人はなし

平時村

いかにせん人めつゝみにあまりてやかゝる袖の涙を

衣笠内大臣

我恋のしのふにのこる思ひ人めもしらすもらす袖かな

内裏に百首哥奉りし時恋

藤原為教朝臣

たのめしはしられすもいはてしのふる袖にあまる涙を

尚侍藤原現子朝臣家の哥合に恋を

津守国冬

せきかねし涙ハあらしなからにおもふハかゝる人なりとも

題しらす

よみ人しらす

忍ふるハ思ふ中にもよしやさハしらるゝものをへてそ涙に

正治百首に　　前大納言隆房

人しれぬ[illegible]けふ錦木のくちやはてなむ袖よみ[illegible]

寛治元年十二月[illegible]思久[illegible]

後堀河院御製

忘るゝもいはぬにつらき思ひは年月いそなかりしへぬらん

大蔵
兵部卿有教

我命かね思ふ山の松の葉も年へぬにいはけなのみ

題しらす

寂蓮法師

夏山のしげみかくれにも小篠のいはれわかるは秋[illegible]

前関白左大臣

夏に出し後もいく世のいはれ秋に年をへにける

読人しらす

いかに思ふ人のうらみわすれまじくさめて侍や思ひ

右近大将道平

人よ我すきなるにもいとせまの心乃うらみいつまでまし

後堀河院御製

思ひいつるともかれしわするゝこるをみるは秋文いつ歌ぞ

後京極摂政家六百番歌合

法橋顕昭

う秋男こそさみはいつしれぬへつらいつやしき年もあ秋

恋の歌の中に　　中宮権亮為経

いはしともいひて人やはなくさまし思ひてつらき人を恋ふとや

百首歌よみ侍ける時恋

尚侍藤原頼子朝臣

我のみやうらみも恋しと思ひつゝもしのふはつらき人やかなしき

寛治元年十月歌合に忍恋

右近大将通忠

年をふる涙くもるゝ身はしらすしほれぬ袖の色をおもへは

題しらす

紀淑文

よしさらは袖の涙はかくすとも色に出つゝ人のしらすは

祝部成久

つゝみしも涙しいはゝ思ひそめし日よりその人にしられん

右大臣

ときのまの涙は袖にあまりしも我こそいはてしのひかねけれ

祐子内親王

せきかぬる涙の色の中々につゝめはあまる我袂かな

建保百首歌合に　　宜秋門院丹後

しのふるは袖にもあまるいつはりのうはにやまぬ涙の色に出けり

恋の歌の中に

賀茂久世

あふまてとしのふ思ひのいさやまゝとくよとうらみてかなしかれは

祝部成茂

神乃浦のみるめし入江の月成けり杉すゝ行やうつるみえし

平為時

月の為に思ひこそやれ清しきに我うつるこゝろのうつりけり

弘安元年百首歌奉りし時

大蔵卿隆博

下もえの煙の末よいかならんのちの名たにもおもひすてぬを

堀河院御時艶書の歌を人々よませ侍りける女房のもとにつかはしける返し

権中納言師時

世にふれは思ひのほかのうき雲のそらにまよはん名のみたちけり

返し

郁芳門院安芸

恋すともいはての森はしのふれと袖にしられぬ涙なりけり

依涙忍恋といふ事を

藤原為道朝臣

いつまてか涙こらへてよそにせん袖の中なるうき名もらさし

題しらす

平貞時

恋すとも人はしらしなかりの夜衣わかるゝね涙にわれはかはらし

中臣祐茂

いかにせん思ひ佗てのわかれにはうき名ものこるなくさめもなし

よみ人しらず

くやしきうつろふ人をわすれては思ひし春を惜まさりける

名所百首歌めされけるに

順徳院御製

かのこにもこえてけふなる東路の霞のうちはわかのうら浪

弘安元年百首歌奉りし時

静仁法親王

わかの浦のこゝろのわかよ人もあまた記て袖にすむまたる鏡

前中納言為藤

いにしへに有けん人のてゝ難波江よ思ふ世のためしこそ

題しらず

源親長朝臣

わかのすむ浦の玉もをとりかねてみし世にしもかゝる袖かな

光俊朝臣

しら雲に風のさはらぬ秋の月影のさやけくもみえし人の道よ

建保四年内裏十首歌合に

参議雅経

妹の田ぬしよくかゝるの川しらす霧ふけてせきする人越つゝは

かにたなはし

新後撰和歌集巻第十二

恋歌二

弘安元年百首歌めされしついでに

法皇御製

かりしへはそれも逢世の契みえて後おもはるる我命かな

弘安元年百首歌奉りける時不逢恋

前大納言為氏

くるしきはわかるる命のうきしのはあらぬもたえて恋しなかねまし思ふよな

同し心を

今上天皇

こん世にはちかふる有つつ恋しき逢をは限りとの命おしまれ

百首歌めされしついでに

いかかするこの恋をたえてつれなきは命をかけてなにか思ひし

題しらす

衣笠内大臣

恋しなぬ身のいかならむことを歎きて逢みんことは思ふ頃かな

中務卿宗尊親王

あふまでは猶思へこそつらきはおしき命なりけれ

前中納言俊定

あひて猶あふのまに恋しなぬ中に後のつらさを思へは

従大納言典侍

有てうき命にかへん時のまも逢世なりせはおしまれぬ身は

後京業平朝臣

おのつからくるゝ思ひはなかりしをわかになかもかなる世ならは

藤原為實朝臣

逢こみる程はうれしにかへるも思ひをさめて後のよの思ひまされは

百首歌よみし時不逢恋

右大臣

わかれても又あふのちの後のなき死はつくいねの中もわかこみをもし

後中逢恋といへる心を

今上御製

うれしきはわかみもしらぬみたまをもちにこゝろにも

恋の哥の中に

静仁法親王

わかてみし後のつらき閑すへてくらはひ身もなきかな

前中納言為兼

逢しよは思ひねの後枕あくうれしゆめさねよめ関ち

右近大将道平

わかてみる我の思ひねの面影をさめてわかし猶そうつるよ

伊豆盛継

わすられぬものいへはみくもつるくしちるね中に後を絶え

法印長舜

面影乃くるよかりしてみしもともいひにしものをのうさを同しと

建保六年内裏三首会に恋歌

常盤井入道前太政大臣

うつりける月日かさねてみし面影はうへの空にもわすられはこそ

題しらす

前大納言基良

いつはとも思ひしらぬ袂ならはうしといふねよのなくさめもなし

光明峯寺入道前摂政家恋十首歌合に寄衣恋

従三位行能

さよ衣かへすしるしのなくさめも袖のみぬれて露の葉まそ経る

恋の歌中に

大江広茂

思ひねの夢の衣をかへしてもなくさむ袖の露そやつれぬる

名所百首歌めしける時

皇太后宮大夫俊成女

なけくことみの里にあらはれて山の井くらき床の松風

光明峯寺入道前摂政家の恋十首歌合に寄庭恋

前大納言資季

見つらむあかつきし山の岩垣や庭もよもきにしけき露けき

題しらす

前参議雅有

たつね来る人をうらむるこの恋衣かはらぬ袖をしのひつゝ

よみ人しらす

うき中のつれなきにかよふ恨をはかはす袖の中に有明の月

寄弓述懐といふ事を　　院御製

うき身にはひきかへさるゝ梓弓いつかうちにこゝろひくらん

述懐の中に　　前大納言為氏

よしさらは身の中〳〵にひきかへる梓の弓に向けてやよるへき

光明峯寺入道前摂政左大臣

いたつらに身をおもひて月日のゆくかたにしらぬおもひのたえさ

前大納言隆房

よしさらは我よはひわか身はさてさのみや人のうらみんかはかる

平貞時朝臣

逢事のしるしもなくて今は身をうらみのかひなきにわれこそ

弘長元年百首哥たてまつりける時不逢恋　　信実朝臣

後はいさあひみぬさきのつらさより思ひしらるゝなかき絶

題しらす　　よみ人しらす

ためしなき後のうきこと逢見てのつらさを歌に我身たえなん

宮内卿

今はたゝ身をも恨よ恨ても身のほとしらぬ心なりけり

藤原為実朝臣

いかにせむうきこの世の浅茅生にあはれ彼けて身はかなきを

弘安元年百首哥奉りける時

花山院内大臣

うちはへてやちつかへし錦木のかひなきわするゝ人のつれなさ

弘長元年百首哥奉りける時不逢恋

常磐井入道前太政大臣

思ひねのとなみの浦のいかにしてまつねとに見る袖の露

百首哥奉りし時同し心を

津守国冬

浦風のもよほしかほに磯の松をみつゝわれさへなきまさるや袖

題しらす

左近中将師良

ひとしほやみるめかりつるを契りてまた袖ぬらすちかの浦浪

衣笠内大臣

伊勢の海ぬるゝ衣のいつまてか逢みぬ磯の浪によるらむ

後鳥羽院御製

まつやくもかよひのなの縄もたえていさとよもいふとや人のつらさ

嘉元百首哥奉りける時寄衣恋

少将内侍

あまの川うきなたつともわかれにし逢見ぬ夜半の衣やのもの

恋の哥の中に

平貞時

すまのあまのしほやき衣なれてしも袖もぬれにしかとしつれなさ

名所百首歌よみける時

従三位範宗

三くまのゝ浦の濱ゆふいく代へぬあはぬ泪を袖にかさねて

千五百番歌合に　小侍従

流ゆくゝ由良のみなとしをおく舟のしけめてもわすれぬ我身

題しらす

藻壁門院少将

よるへなき身はかくし小舟ゆくへも見えし入江にまよふ秋のつ

西園寺入道前太政大臣

こりやなみみぬめの浦に住わまし人うらみよをうみや思ふさ

右大弁経継

身よいかにまよふくるにもあまのかる藻のみたれて

遊義門院

川我なくもありなしにまたはれしるのわすれし袖はぬれつゝ

家に百首歌よみける時名所を

光明峯寺入道前摂政太政大臣

立田川ちるなる紅葉ゝの水もなかれし袖の外かは

後京極摂政家六百番歌合に

従二位家隆

いにしへもみ澤田川袖にしくらへつゝぬる也

遊義門院の中に　安嘉門院甲斐

いかにしてよゝのさかのほりていさやゆくへもしらぬ夜の山川

三条入道内大臣

思ひきやのこりしゝいぬつもりよわくて法やかなふをしるしや

皇太后宮延紹

おもひ川いはゆく人よなひくもの下にしはし逢をまつ覧

如願法師

涙川うきせにはやき水の流れすむかたにきてわすれいたき

陽明左と

民部卿成範

ちしられてこゝろは世中に身をあふせて滝川の浅き瀬の御

影しらす

藤原季宗朝臣

人しれぬ恋路のはてやみちのくのおもはぬ山河の上にも

弾子内親王

よろしのみ祈りゐてまた思ふ河ことなる世中の契ならまし

法眼助済よみけるを送ける熊野十二所（七百 イ）のうち

世中に

大蔵卿隆博

我袖乃雨しのゝやいつしかの野への下草露をうく大

光明峯寺入道前摂政家の三十首に

普光園入道前関白左大臣

飛鳥川ゆくて乃岸の萬かはりをしてや人よわすれぬらんを ハ

恋の歌の中に

素暹法師

申ひ申し共いかにことゝふつるを我在庁にはあらぬ人にはし
人はすゝめく日吉祢宜二十一社歌よみ
侍ける時　天台座主道玄
相坂の関のこなたのいつるなれは関こえてとやみえくるらむ
寄山恋といへる心をよみ侍ける
今上御製
関守もてらす逢坂の山なりとへつるにしるしの中にある思ひはし
題しらす　権大納言師信
逢坂にかゝる坂山の名のミして我身よこえぬ関こえかねん
前参議實俊
いかにせんその人めの関ちかくしてよそに道ある逢坂の山
白河殿七百首歌に寄雲恋
前大納言為家
伊勢山つらしいかにしての中の岩のかけ道そのころへなつかしと
建長元年又之歌に寄山恋
今宰相信師為経
よしさらはいつかはゆかむ山しけもりかくれて人のまつらむ
題しらす　よみ人しらす
恋しなむ後せの山の峰のくもきてあかはかりに哀とも見よ
よみ百首歌の中に　二條院讃岐

都のみもたつ小雲ハわかぬを立の姫ぞ雨ふりくる
恋の歌の中に　前参議雅有
姫こし宮のやしろハいりそこへる思ひのりぞ志つ恋
建保六年内裏歌合に
後久我太政大臣
松島や我身のうきにつくしまの姫のすゝ恋をうへとも
寄姫恋を　前中納言定家
すまの浦のあまつをとめに思ひはやつし塩やくあまの人ハ恋
堀川院よ百首歌よませ給けるに
大納言師頼
思ふまゝあつさの海みつ川ま見わたしてやゝめる名の道
文保百番歌合に　後鳥羽院御製
川我ゆくもなをかへて思ふにうき名をおもしろかりけり
祈恋を　前大納言実教
うき人のつれもなくて我か命あらはこそ月をいのりけれ
内裏百首歌よませし時同し心を
前大納言為世
川我なさともよしやいのるとも神にもうき事ハ後の世をなをまつ
恋の歌の中に　小侍従
住吉の神もいのりしあはしの御川も久しく成にけり

高階宗成朝臣

思ふ事のかはりし折てふのさくやいかにてや見え

章義門院大弐

悲しさはみのことはりの我なくもいひ思ふ人はまたきこえ

典侍親子朝臣

いとまなく雨はよしへの我身をそへつゝ人のは我なから

弘長元年百首歌たてまつりける時不逢恋

前大納言為家

こひしなむそのはてしらぬこのみのはいまはよ命なからへてさよ

題しらす

宗覚法師

はかなくもなにとしてしもなけれはそへて思ひつくしとは命なからへん

菅原基隆

恋しなむ後は逢ふせのあらはこそへはなかりけれ命なからへん

法印雲雅

我のみやあはれしらしと思ふにもつらき人もかくこそ命をしき

西円法師

いたつらに我のみ人を思ふにもおもしろしとも人なかなか

入道前太政大臣

よしさらは恋ひ死なむともなからへて聞かせたまはむことのあはれさ

弘安元年百首歌たてまつりし時

藤原為氏

我のみや人にしつゝ歎くともおもひ出てたる身こそはかなまし

百首歌よみし時不逢恋

前内大臣実

さりとも又あひみてはなほ玉のをの契りのいく世をかけて思ひわたらん

恋の歌の中に

大江親重

めくりあはむ思ひし世にもたへかねて今は命もえこそ惜まれ

源親長朝臣

つらくても待ちし蝉の身となりて後の世にてや人を恋ひまし

千五百番歌合に

醍醐入道前太政大臣

池水にうきねをしたる枕なるらんあふことも恋もすくなし

題しらず

前中納言資實

しほ水に救ひし人も我しもしらぬ恋にや沈みはてなん

藤原仲朝朝臣

思ひわひ今は寸への枕にもねられぬ涙をしのひかねつる

光明峯寺入道前摂政家の恋十首歌合に寄

弓恋

源家長朝臣

引かれるのゆみしよむ名(?)思ひよりいかに引くらん

恋の歌の中に

前大僧正聖兼

思ふらんその心をもいつはりて道あるすゝのいつかたのまし(?)

前大納言實家

玉かはしくてぬはゝきの年をへてさのころや人は思ひしる我も

仁安元年百首うたよみし時

入道二品親王性助

さつきかし思ふ人つまうしものはつるゝも猿ね梁ね山をて

藤原為信朝臣

逢見くこえし月日の果をもうつるをゆくよの人ならに

題しらす

前大納言良教

いにしへのうきをいはてもかはるゝ世々の昔ねたちてわれなりき

権大納言實國

きゝ乃世に我まんやいはつしえむらひあまてハ

かつ花開しやそ

新後撰和謌集巻第十三

恋哥三

後京極摂政家の六百番哥合に

従二位家隆

きても猶人の心をしられねは逢は契のさらに思ひしらるゝ

思ふ契恋しいまをよそとそ聞ける

今上御製

偽としりし文をたにしのふなる頼の人めのいまもまたるゝ契かな

山階入道左大臣家十首哥に寄言人恋

前大納言為家

いつはりのなき世の中しあらはこそゆくすゑまてに思ひさためめ

中務卿宗尊親王家百首哥に

慶融法師

あなかちに人の契をたのみても命のほとはいつまてそ絲

恋の心を

院御製

逢まてと思ひしねはかりのみいのちしなくて契りのうつりかはるやのへてん

後京極摂政家の六百番哥合に

前中納言定家

あらましをまちよわりぬる命かなあやなくかれしことのはのみして

題しらす

従一位瑛子

人はくのいはもつたへくるそとの川かう哀とかゝる言ぬらん

内裏に百首歌よみし付切題

遊義門院大納言

歌しもわすれぬ世にしはきつさきてき題して思ふ今ぞたぬ

歌題を

法印宗円

さるにてもいかなるものもとめし道のある世なる人の情なりける

藤原光盛

道を我世の末にも又いのりきえてなき世はしるなれは

素暹法師

いつはりと思ひなれにしや歌よみしたてし人の心ぞ人をも

中務卿宗尊親王家百首歌に

前参議能清

あはれけに道なきまでに我人のしのびや我の末にうつもれん

平宗宣

道のため命にかへし言の葉もよしやよしあしも思ひし

高階成朝

あはれ又人の心をうつしつゝいにしへの姿やたつるらん

前中納言資高

いにしへのしのびしもさらに数まさる人に歌よむ人やなかるらん

前中納言俊光

けふ思ふ心のうちのまつ花は契る雨にまたえやはれまし

按察使実泰

さりともと思ひなからもまちわひぬいつのかたにかつけてこそまて

清書国道

偽をかねてしれは雨ふれとさらにいつまて人をまつらん

近衛関白左大臣

契りをく人の宿にはたのみても又いかならんゆふくれもそ

安嘉門院大貳

待みるやよしいつはりにあらはしてしらぬ夕暮のそら

賀茂久世

さりともとたのむ夕暮の雨にしてやいかにしをれんこゝろなるらん

法眼源承

こゑたてし月にすゝしきかねのおとはてゝ夕暮のうちのあはれそ

前大納言実兼

くるゝまをたのむといふかいひ[illegible]ことしてかはりのこゝろなるらん

院御製

忘れてもまたかけてたのむ契りしく人まちつゝそや

前大僧正道性

思ひつゝゆふくれまちてなかめやるいかにしてかは人をまつらん

大蔵卿隆博

恋を思ひしらぬはなぞやて又かはるたえぬの夢を待つれ

賀茂行久

契しはやすらはの夕ぐれもまして待けるほどぞあはれなるよ

百首歌たてまつりし時恋歌

法印宗考

こよひさへいたづらにゆふべのつらさこそまつ宵ならで人をまたじ

恋の歌の中に

よみ人しらず

更けにけるこよひも待つる恋しさにねてもひとりはかなしかりしも

津守国助

人めのみしのばるゝこそ思へどもなぐさめかねてこそまさりけれ

前参議為實

思ひやれ秋のあはれも月をみてたゞ涙にくれつゝしのばれし

法眼兼誉

待ちわびて更けゆく月のかげのみやねぬよの袖の涙なるらん

平宗泰

涼しからぬ人の思ひはまさるらん我が身にも秋ぞまつ出る月のかげ

藤原親方

なにゆゑにうらみしかどもいとはぬ人のつらさにうき月もみえぬ

百首歌たてまつりし時恋歌

昭慶門院一條

更行しまつらむ山の月みて後も思ひいりやらじ

読人しらず　九条大夫女

為のなてもこぬ人はうらみよいかにも出る月かげ

月前待恋といふことを

今上御製

待ば更行鐘の声する我は待宵の月のなごりは雲の名残し

同じ心を

典侍親子朝臣

来ぬものゆへによひもいたく待ふくる更ゆく空に山まちて出る月

千五百番歌合に

参議雅経

山の端に入るも月をまち山とたどる人の有明の空

寄月恋を

後嵯峨院御製

かつきえの月のうは風はけ人の心のかはるなくもよる有明の月

百首歌たてまつりし時待恋を

藤原為藤朝臣

更ゆけばせめて我身の音すく雨よこよひもなすみぬ言の葉ぞなき

弘安三年内裏百首歌たてまつりける時寄戸恋

前大納言資季

こひわびて今の我身に待ぬべきものとは我もならずなりて明ぬ

寄鳥恋を

参議雅経

待よひにいくよ山よりくる月わかれは涙数かはる鴫のはねがき

久安百首の哥に　　待賢門院堀河

よのなかにふる身のさし歎きけり人の心をうらみとさるら
　影しらず　　　　前大僧正道瑜

たのめねしつゝの心よそにちらぬ人のうへに思ひ寝ぞよ
　　　　　　　　　平時常

よの中にしき思ひ寝ても袖よりそてまたいはん事かな
　　　　　　　　　左近中将具氏

うかりける人の言葉もなけくとも我も袖の有世なりけん
　　　　　　　　　九条中納言兼基

数ならぬしのびしのびに関もいはすきてもことはりなけれは
　　　　　　　　　清原因信

うき身には思へは人のつれなさも情に折は数つゝをなりけり
　百首哥奉りし時詠る
　　　　　　　　　梅窓後實泰

なくさむる我かゝる身にも猶数ならてあさからぬよの数や猶
　寛治百首哥めしけるついでに宮御井恵
　　　　　　　　　後嵯峨院御製

関なひよるこゝろの関の名もいはしらてかへる身なりけれて
　又此哥よし東宮留恵
　　　　　　　　　権大納言師兼

待しよりやかてかの夕くれならへりしくらへてたのむ夜半をそれ

月前逢恋といふことを

前大納言経任

別しつる人の来し夜に月影をまつにもみつる夜はも有けり

恋哥の中に

中務卿宗尊親王家小督

つらかりし時こそあれ逢みての後さへ物はまさりけれ

前大僧正源恵

数ならぬわか身よりこそ思ひしにいつからし人の命をそかけ

思會(逢)書恋を

前大僧正聖兼

うけしとも思はてさらめ逢まてを夢に聞ならへて人よわるる

題しらす

従二位家隆

見しも又わすこみるよの夢なれや残るやつれの秋の雨にいさなくもなし

前大僧正慈鎮

うらしきをこよひはいまし為そや袖は涙よ枕のこゝろ

中臣祐賢

忘らるゝ後のうき名を思ふまてわすれはよその人よ恋しき

前大納言為家日吉社にて哥合し侍けるに

寄枕忍恋

光俊朝臣

思ふこと見えしの枕のわすれしたこそ氷のもらさすもかな

恋の哥の中に

大蔵卿重経

いつまても絶なくしのふくにやつれてなかのおしき別を

文永三年歌合に　来不逢恋

尚侍藤原親子朝臣

つらくなるのとわつらふの海中島沢は志りしもなくつらきかな

別恋の心を

権中納言國信

人あり島のはなしくはいかりしてよ別もらぬもとう秋しりけほ

よみ人しらす

わかれいかしくるしのとゆふ川むし島のなをしのふらし

大江親重

わかれゆくの別もしらぬ鳥の音はなにのつらさに鳴もたえぬ

法眼源承

とめて後の世をこそあらめわかれかへらぬ別なれは

平盛房

あふまてと思ひかさぬる朝露のおくる別てかきて命を

文永百番歌合に

大納言通具

わかれつる庭は草葉のうへにおく秋やなにかの秋の泪そふ覧

後京極摂政家の六百番歌合に

寂蓮法師

逢事の思ひかしの枕あり別る恋のりしめ有ける

跡しらす

源親長朝臣

あはれなる又有明のいりかたに我も限りの月の我身なりけり
大江茂重
ゆくすゑは我をもしのへ袖の月うきに我身の明るよな夜な
洞院摂政家の百首歌よみ侍りけるに後朝恋
藻壁門院少将
有明の月はつれなきならひにて我すむ宿はいまの思ひのあまりとそおもへは
題しらす
前大納言為良
なかなかに又わかれてはをしまれぬ身にしたかふる有明の月
前大納言実教
うき人と我さへうらみ我面影をうつしてみよのこさぬ明し月
前大僧正慈鎮
うらみこそつきせぬよのなかにかけもなきみはすみよしのよ
俊恵法師
我なくはたれかはしのはむ我もけふたれゆゑにかく袖のなみたに
式乾門院少輔
かはれぬ袖のわかれのなこりにもまたたちかへるこゝろなりけり
祝部成良
ならはなくみちのそらにもこのよかるかよひち枕
平久時
あはれしよの後はならはぬ物としもしらぬ我身のかなしさ

弘安三年内裏百首哥たてまつりける時寄氷恋

近衛関白左大臣

逢みてもなほその名残あかり氷にとちることしめぬれそへけむ

恋の哥の中に

尚侍藤原頊子朝臣

一すちにおもひし人のうくものゆかりつゝかはらすこそあまることも袂哉

文永七年九月盡内裏三首哥に契恋

前大納言為氏

たのみけり波こさしとは契りしもいかなる人の末の松山

題しらす

従三位隆教

わするゝもさきの世のみ袂哉泪けされもわすれのうつさ哉

藤原泰基

逢事をいつやゆめのきえかくるよそ見る契りあはさも

従三位経之成

残りてもいまはわすれてむかしもの帰るわかれにやすらひ過

寄恋の名を

内大臣

思ひやる人の名をへてすゑいくへともの袖ぞの白くて

藤原為信朝臣

頼みても思ふ心つくし契りなしまくの哉白波

恋哥の中に

従三位氏久

しら川海の底こしらとていかにあふみかたものゝ人をさね

後京極摂政家六百番歌合に

前中納言定家

面影はをしへし宿に先たちてこたへぬ風の松にふく声

題しらす

源有長朝臣

いかにせむまきのしけしもあとたえてさやかにてらせ谷の家

権大納言師信

ゆくへしらぬ雨ふるみちの人もなきわけこしあとそやかてうつもるゝ雪

前参議雅世家の歌合に

藤原親盛

いかにせむ岩のこけちの衣川たちてはねておもふも袖のなみた

題しらす

権中納言経平

住吉のきしのわすれ草流れけむむかしにたえし草はわすれし上ゑすな

順徳院御製

濱千鳥よふかきみなとの江はあはれこそみねの浦に祢覚の友鳴

鎌倉右大臣

我せこを松浦の山の暮かはしまさるにたよりよしもかな

藤原雅朝

里のあまのいさりかなし焚よりやかてみるめのさそはるゝらん

晩風催遠思といふことを

平時村朝臣

みしらすは風よりもこぬ人の心よりも思ふ妹か夕暮

ものいひける女のわすれかたになりにけれは

こ申けれはつかはしける

太宰権帥為経

もろともにかけし契はたえぬとも忍ふるころにいかにまつらむ

題しらす

よみ人しらす

身の憂さのつらきおもひにくらへつゝ人をうらみに

命にかへてなき

新後撰和歌集巻第十四

恋哥四

弘長元年百首哥たてまつりける時遇不逢恋

衣笠内大臣

いにしへ見し間をしりしも山水の絶て程ふる末をたのます

弘安元年百首哥たてまつりし時

院大納言典侍

くやしくそ結ひそめけるつかのまにたえし山ゐのあかぬ契を

前大納言為家家の百首哥に

信実朝臣

稀なる人しもやはりあひて契りし後でも我心なりける

題しらす

儒正實隆

七夕のわかれも我身もかたらひに年をへてみやはする

よみ人しらす

逢ふまでを又いつともいはさりし別れゆくこそかなしかりけれ

思ひ出る人よりもまさる思ひ出の後のいつまでもしらぬ

従三位忠兼

あはれとも又いはまし物をなけきこそかりにしもの有世なりけれ

寛治元年十月合に遇不逢恋

花山院入道右大臣

いかにして月ぬるくれやしきりをみてはあはぬ我身なりける

同し心を

前太政大臣

夏の夜は契りし中も我なりてつらき人の心しもあらぬ世の中

百首哥よみし時恋

権大納言公服

もろともに人の心を頼みてこそつらき身とは思ひけるかな

白河殿七百首哥に寄宮恋

後嵯峨院御製

いはてのみ思ふ心のうちにこそ我もかへりて床のさむしろ

題しらす

権中納言公雄女

かたらひしこひしいにしへの袖まくらうき床の月をみる哉

今出河院近衛

くまもなき我涙にもやとりてそ袖に月をもみつゝけれ

前大納言基良

面影は又いつかはと思ひ出の月影よりも面影をとはぬ

建保百番哥合に

前中納言定家

思ひ出よたかの夜くのあふさきもつの思ふは月そ宿る

宣陽門院越前

いつまてかとちてなかれ別しよの有明もなし

寛治元年太皇哥合に月 前

太宰権帥経信

思ひ出く月をいはしもの風さえてみし中のあり明の月

建保の中に

源親長朝臣

川霧なくてに面影のみをつけし又もみえし有明の月

従義門院大輔

うくもつしさえたまよう面影のかれねのあやなくみる哉

法眼行済

忘れすよいひしゆかしさの袖の月の思ひみる面の影

源家清女

忘れしよの床はかたりね思ふ夜に又みる夏の面影そなき

まれにこそ渡りそめけれ後の世の契をかくる夢の継橋

従三位藤原宣子

洞院摂政家百首歌に遇不逢恋

忘れねよ夢かとだにもおもひしをそのまゝに絶えし

前大納言為家

題しらす

さしもまたわすれぬ人と歎くらむ見しは昔の夢になりけり

津守国助

稀にみし夢はいつの契とて頼まぬ人を恨しつるかな

丹波行長朝臣

逢みしは一夜の夢の草枕むすふはかりの契なりけり

法印聖勝

かりそめの夢よりて後は草枕又もむすはぬ契となりけり

権大僧都珍覚

後京極摂政家の六百番歌合に

いそ枕よるしの衣をかへしてもいくよか見し旅の夢をかへまし

従二位家隆

恋歌の中に

さめぬれはしはしのうちにまて中〃やなか思ひねの夢

左大臣

思ひねの夢のうちまてなくさめてさめてもうつゝは猶そ悲しき

中原師宗

従一位禖子

そのまゝに又かはしもわすれけりことゝさへもかはりし思ひなりけれ

百首歌めしけるついでに遇不逢恋

今上天皇

朽ねたゞ同し涙の袖の色を又もみすべき契ならねは

弘安元年百首歌たてまつりける時同し心を

従二位行家

思ひ川あふせのいかにかはるとも又は涙のながれこそすれ

題しらず

惟宗忠宗

流こゆる袖の涙のしからみにかけてぞつらき契なりける

高階宗成朝臣

川瀬たに有しにもにぬ心にて又とせきぬる袖のうき流

覚意法師

逢事はよそになりゆくおのが中川流るゝ水のめぐりあふべき命

内裏五十首歌合に欲絶恨恋

昭訓門院大納言

色みえて恨かねるは雨よ鳥の羽に成行道のつらさは

前参議忠氏女

恋歌の中に

いにしへの雲のうへのみちのゆくへまてよそにみすぐし成行人の玉章

権少僧都経乗

かゝらてもよしなき人めしのふやは頼のもしき雨のはれぬそはちし

別後恋といふ事を　源兼康朝臣

ゆしめける相坂山のさねかつらしられぬ跡をはなけく哉

題しらす　大江政国女

しのふる道のさはりは月影つれなくて人をうらむる哉

百首歌奉りし時（中の）遇不逢恋（舎）

前大僧正良覚

逢みし後あふ坂山のかひもなしかよはぬ道のさはりなりけん

恋歌の中に　従三位藤原宣子

うへてやかくや見になる我恋しきはちのうき身はへてそめにしも

法眼源承

足柄の関つゆはいくよのむかしにゝく後の恋をまちわたるかな

藤原基任

かりそめもむかしになれる人の心はつらきゆふくれまちわたるかな

前大僧正忠誉

今はとて思ひやすてゝわかれけん夕は袖は思ひしらなん

源親長朝臣

思ひいてゝは又あふ川のしつくゆへこゝろにやみねは契をわすれけり

後後逢恋を　前大納言実教

そのまゝに思ひはてなはいつまてか（かは）ありしにまさる契をそへける

題しらす　　　　読人しらす

よそ人にしられしとのみ包しは我身ひとつの歎しけるを

前中納言為兼

我ゆへに思ふ事をし包つゝしのはゝいかゝ人の心をうらん

内裏五首歌合に欲從恨恋

遊義門院権大納言

思ひ出ぬ今てはいふともやんのまことにわすれはてすも

藤原為景朝臣

あやにくに恨みは猶やまさるらん人かなさてうらめはる人の心そ

恋歌の中に

平時春

あさねよのはたえつるはあかぬの枕ぬらさもうらみつゝ絶る

賀茂重貞

よるよるの枕のちりにふる人てゝまてもさえやせ心は恨を

宜秋門院丹後

よそなからわれはたのまし中々にうらみ身の程を思ひしれとや

遊義門院

よみ人しらす

いつはりとしるゝかきつるをみて又たのまるゝ人よとはかとを

うとくなる契をは人にかこちてもうらむは我身に恨むなりけり

思ひなからうらみかねつる身の咎にさてもそのまゝに思はてゝ心かなへぬ

同し世にしけるをしらて思ふ人のかねには命ありつけにて

平行氏

先たゝぬ身はおしからし世にありへてかゝるをみるもうき命かな

中務卿宗尊親王家百首歌に

典侍親子朝臣

いかにせん今はたおしむ世中よあらましかは人よ老ぬとも

題しらす

衣笠内大臣

なからへていける命のはかなさをきのふ計の人にてもみるか

式子内親王

夢のうちもうつゝもなかくつらくあるへしそれしら袖のなこりを

新後撰和歌集巻第十五

恋哥五

建仁元年三月哥合に遇不逢恋

皇太后宮大夫俊成

秋風は又こんこともうらめしの思ひたえにし二とせの秋

月に人を

尊治親王

人はとやいひし契もかはる世にむかしなからの月こそつらけれ

権大納言公顕

人こそは心のしまもかはるらめ月の大空しもそ忘れすものか

百首哥よみし時忘恋

前内大臣実

もろともに忘れなとこそ契りける昔のまゝの人の心は

題しらす

よみ人しらす

忘れしといひしはかりのしらぬ契やはしはしの中の情なりけん

百首哥よみし時忘恋

遊義門院権大納言

しの契にうつりて今はかへさしや忘るゝ方にうつる面影

後恋の心を

今上御製

いつはりのしらぬ契はあらましを頼みそけるよなともいかゝ契こそはしる

建保三年内裏哥合に

信實朝臣

なきさするにそへてたへぬる袖もあらぬ根の夕暮のそら

新院少將

秋やしる袖のつゆにはなれぬる夕暮にそへてまさるいろかな

弘長元年百首歌奉りける時 秋歌

前大納言爲氏

よそにのみ思ひし出て若菜の野守の鏡かけてみしかは

建長三年九月十三夜十首歌合に 寄月恨
戀

藤原隆親

わすらるゝ我身を旅のいつはりに月さへかはる影のうつりよ

戀歌の中に

安嘉門院甲斐

なのめにし人の心はかはるとも我やはかはる山のはの月

九條中將忠基

こひわたる人のかよひ路みえなくにもろくていかゝ袖の月影

正親町院右京大夫

いつはりも今はかきりの暁にかはらぬ森の鳥は鳴くなり

從三位源親子

思ひ入ぬ別れもしらぬ暁も雨鳥のねにぬるゝ袖かな

弘安元年百首歌奉りし時

入道前太政大臣

三代まてわか君か代に道別みしをかしこきよのよにもしれぬかな

文永二年九月十三夜五首哥合に述懐

近衛関白左大臣

きぬ〳〵の暁ならてうきものといひしも今はむかしなりけり

題しらす

権中納言家定

いつはりの暁しのわか秋にまてよるをまちしも今は成ぬる

百首哥よみし時過不逢恋

権大納言公親

さてもなほあふよかきりのわかれを限とも去年別し我やまちなき

恋の哥の中に

藤原宗秀

面影のうき月にうつりね中なかは我よや人を三秋もてまし

前中納言資光

忘らるゝ身とは有とも知ならてやきて思ふ心かはらと

藤原為継朝臣

なほさりに思ひはかくもいつはりのことのはの契の行ゑ

百首哥よみし時忘恋

藤原為教朝臣

うきなりしもとのつらさや今更に思ひはなれくる契なるらん

題しらす

藤原長経

又いまも思ひはさそ花すてゝかれぬる中のはのをむすよとも

よみ人しらず

よそにしてなかなかひさしみちのくのこえけるこそ月と中の関守にして

津守国助

しみつのうの月のよるそこす浪のうへやさはなけてゆくらむ

衣笠内大臣

しら浪のかけてしも人にしられぬるやしら浦わのみるめのみかは

弘安元年百首哥奉りし時

前中納言為兼

なれし人のしのふくさのねのみしてものおもひねのさくらのたのみ

寄草恋を

賀茂久宗

たのみこしことのはのみちもたのめこしもはらのくさのなのみかな

平親清女

わすれなむものをおもひのしけきくさのはのおもひねのみるものを

花のわかれをよみてまかりける人のかへりて

京極

わかれにし花のさかりにうつりてもみつるかひはなき人のおもかけ

入道前太政大臣

すみそめの桜のえたにしけるくれのみすして

めくりあひて月日をおくりかへりて花よりのちのちにさかりさく

題しらす　民部卿資宣女

めくりあはん事はしらすかはかりは秋ことに花にはつらき事そ見えける

遇不逢恋の心をよみ侍ける　土御門院御製

いはぬ草の花の色やうつろはん心もしらぬ袖の露けさ

寄草恋を　前僧正公朝

月草の花すりころもうつしてもうつろふ人そ恋しかりける

建保二年内大臣家百首歌に寄野恋　前中納言定家

こゑさへやわたる大野の萩の原うつろふ色にいつかひとしき

題しらす　行念法師

うつりゆく人の心の秋風にまたきうつろふをのの萩原

後京極摂政家六百番歌合に　従二位家隆

秋風にあはてあさちの色よりもかはるは人の心なりけり

建長百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

秋のいろに心まよひの時しもあはれなる萩の上風

里に住ける時萩をよみける

題しらす　宰相典侍

中々に思ひもいれぬ身の萩をなにゆゑ人にみせけん

恋哥の中に　藤原實秀

うき身よいかにやくしの紫の附句もあへすなりにけり

法印頼舜

秋つゆをきえし人木のはよわれなれ嫁風の花はそのかけなり

権少僧都房厳

以すいのちよ花をもよふく草のうへを人の秋つゆなれこは

藤原経清朝臣

これも又世の中しいつと思はすはかもさはしらさりなむへきに

行蓮法師

かもうしこ秋つゆし中の中なりは今下の後や人よりのまえ

寛治百首哥よみ侍ける時寄衣恋

源俊平

くやしくにぬれし袂のかく衣思ひいへすまもひしなかなき

題しらす

権中納言家宗

今はとて別てこそし月日さへ思ひいてていくやしかなき

修理實重 速

年月のかはれいてこそ恋しきの音しらぬ人なかなし

よみ人しらす

今はしるわか恋いまさらし年月は何のいのちまつ思ひけん

内大臣

かく思ひつゝみし此の世はいかに成ゆく中の契り

二条院讃岐

今はさは何か命をかけくそて恋も人のみすゝめかし

百首歌奉し時遇不逢恋

前関白太政大臣

思ひねの心のうちを忘れなく昔のまゝに

みる夢もかな

新後撰和歌集巻第十六

恋哥六

後朝恋といふことを

中務卿宗尊親王

いかにせむ年のをとこてわか坂の関はむしろの道こそかはれ

家の六百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

やすらひに出にし人の下ひもをめくりし野辺そくらはみ

前中納言定家

いとゝしく月のあかつきやの思ふ草思ひぬるつゝ枝をわけそ

哀しらず

よみ人しらず

枯はてし人はむかしの忘草つみおく袖よりのこる風かな

院御製

いつはりし人の頼もむかしにて我身よおもふくずのうら風

仁安元年百首哥よみし時

権中納言公雄

思へ宮城野への露ふくすも旅風の音なをゆふへはしもうらみやはする

恋哥の中に

寂超法師

いつしかみし宮城野の沢の忘水今そうらみと思ひはいかにして

従二位家経吉社ならし哥合し侍けるに恨

後恋

津守国平

我なかのいつはりはてつみの塩干のうらみしまたつきなかの

後京極摂政家六百番哥合に

従二位家隆

思ひにはぬるる袂にかはらむとあまも人をうらみぬ袖のぬれまさる

百首哥よみ侍ける時恨恋

法皇御製

こちくやふかきこえぬれなる里のあまも衣手うらみは中々上る

寛治百首哥奉りける時寄衣恋

光俊朝臣

いつはりのいつとさかりし夜中につらきしよりの恨かな

恋哥の中に　　左近大将家平

けふくることもみえいつかはしらぬ身をもへて人をまつらん

従三位行能

山賤の上川ゝみゆるのいくへつゝ川るも恨みは山すみにも見え

道洪法師

しのぶる恋の深ゝは思ひしつれ川るゝことにもやる袖かな

中務卿宗尊親王

うらみてし人を今はうらみじ恋しきのことならずして

藤原忠資朝臣

恨みても後こそ人の恋しけれ川るゝことにおもはぬ人ならずして

前大納言教良

いかに思ひてなるかはらぬ袖の色さくさぬめては

中臣祐春

いかにせむうき身の程を思ふにはことさらにも人をさぞ

三条入道左大臣

身をはまた思ひしらすもなりにけり人はうきねなるならひに

平行氏

我こそはまつうらみし人や思ふらんあまりにわれはいはて過さき

津守経国

一すちに身をは恨みつゝ我つらき人やはいかにしおもふらんこは

入江相重

今ハ又いはてしみての後さへ忍ふる人の名を

入道二品親王性助

うき名をも惜からぬ身の忍ふるハ人のつらさをしのふなりけり

百首哥めされし時忍恋

今上御製

人はたゝいふにもいはし忍ふるハ我思ひハ猶やうらみとさる

忍恋の心を

もらさしと思ひしもすゝろに我身ならしよしか思ふ心のみな染て

百首哥奉りし時忍恋

右大臣

忍ふとも身にしつれハ人よりも身にもあまるらん涙の色にいて

題しらす　よみ人しらす

ありさりとみえぬもしらぬ我身のことにまかせて思ひ余る

院にて三十首哥めし時忍恋

人しれぬ心のうちの思ひこそ身を流しても忍ふる涙

前大僧正実承

百首哥奉りし時同し心を

前大納言為世

忍ふともよそのつらさにいひもせす人やしりけん

前中納言有房

命をはしらさりきぬかなかさは此世ならぬ恨をさらは

恋三の中に

法性寺入道前関白太政大臣（？）

逢しにかへし命のまゝならは人のいのちも何かはなけかし

右大臣家讃岐

あふことは人のつらさもわするゝを命ゆへしも身をて恨し

平宣時朝臣

あふことはいつをかきりと見えてなからへ人のうきよあり世の命なりけれ

よみ人しらす

うき山にたちそへたる中なるは家をかくすおもかけしもなし

権中納言経平女

これ思ひとりしらてきみていかて何ともみをこすのいのちさそふ

藤原為宗朝臣

かくつゝ思ふよにけぬいのちこそあふをまち中にも悩むなれ

後嵯峨院大納言典侍

いまこそ思ひはすいらなくはねをやすらう人の身をいつらんか

白河院七百首の恨不逢恋といふ事を

後嵯峨院御製

年月はわれもかなしく思ひしるまてしる人あらは

百首の歌めし時恨恋

前関白左大臣

もろ共に契りしよゝの根ゆゑこそ風にこそもろく見えさりしか

右大臣

うらみても猶世にあるかなやれなきさをなきさぬ涙
哉しゝす

後法関白左大臣

うきなからなれぬるかは年月のつもるそかなしき

きくこそかなし

新後撰和歌集巻第十七

雜哥上

建保百番哥合に　　前中納言定家

いくとせのかさしおりけんいにしへの三輪の檜原の苔の通路

従二位家隆

幾代にもたえしなかれはたえせしもの人よりおちける布引の瀧

野中の清水をみて

寂蓮法師

汲人は又いかにしへたつらむしも野中の清水思ひやるかな

弘安元年百首哥奉りし時

土御門入道内大臣

有し世をしのふる涙の露ふかく今もむかしの道のさゝ原

住の江にてよみ侍る　如願法師

住吉の松ふく風もかはらねは岸うつ浪やむかしなるらん

題しらす　権中納言公雄

いつのよくらふるまてはかよふらん風はむかしのわかの鶴舞

前内大臣実

くれねしてあすむらにかへるあまのわかの鶴舞

海邊夕さうを　今上御製

あまのすむ里のしるへやこれならんくるゝはみゆるいさり火の影

題しらす　よみ人しらす

風ふけは浪うつ磯の松なれやいくよしらすもみるみとりかな

白川殿七百首子日松　後嵯峨院御製

子日して今日ひく小松の末遠くよはひを君にみるよしもかな

春の雪の中に　前大僧正良覚

け庭くらき雲の行方のはるゝまもしはしなれしき雪のふるらむ

雪の山けふくれて降ける雪をとめ月の廿日

比良万里小路右大臣家にて降けるとよ

月花門院

消残る雪にいけてや我宿をもとめてきつる人のこゝろよ

梅乃花よりけるに藤原為道朝臣のもとへつ
かはしける

従大（中イ）納言典侍

色香をもしる人ならし梅の花のなにゝとてそ折る

返し

藤原為道朝臣

いろかをもしる人からそわか為にみるらん句ひこそ色

題しらす

平時高

人あまたおとろきて我袖に梅のおもひは春の夜の夢

春夜の中に（イまよ）

平義政

明やしてくるのみにほふしゐる月よふかきこゑをそなにいはん

前大僧正禅助

御よりはよしのゝ宮にかゝりしもつれなき我か身はるの居るそ

津守国助

志賀（しつ）のうらや春の釣する袖にみてまたきの花も浪にみゆるらん

前大僧正源恵

ものさしも設けも霞の中の遠しにみてこそ居る人ま

院に三十首歌めしける時春雨

入道前右大臣

世をすてし身のおろかの袖につもれるこゝろの春雨

題しらす

正（従イ）三位経朝

我ゆゑと風はこひいとはし山桜花ちるまてはいとはれぬかな

平時直

雲ならぬ花にはみすな山桜ちるをまちてそまたもさかなん

中務卿宗尊親王家の歌合に閑居花

前参議能清

あはれしる友にまたるる我宿は花咲やとも誰かとはまし

三十首歌めされしにふるさとに見花

院御製

あはれ今は身はいにしへのならなるや我世の昔忍ぶ木の下陰

面のふるさとける納言のもとに花をつかはすとて

二品法親王覚助

思ひやれおいそさびしきもともすゑにけりこの春もつき

花の歌の中に

藤原為継朝臣

さくむのさかりをみてもと蔭に春のまてぬへきまてと歌よむ

藤原宗泰

かのあはれ我身もあはれ山桜ようふわか春の恋をかなしむ

正治百首歌に

源師光

年しるに花はさけども人も我れ我身ふりにしは春ぞかなしき

題しらず

[illegible]

いにしへはちるをおしみし花見ても我とこそか命よ人をまち

山里にすみ侍ける比花ちりて後に雨ふりける
くつれくまて侍ける人のもとに

平親世

おなしくは後はなにとか山里の花みにこそ人はとひこし
花の盛に山ちるに雨ふりくらし見る

道信法師

いつしかとちらうつろふ世の中に雨てもちる我身をなけくらん

題しらす

源之行

命をもおしむ人やなかるらん花にもちる世を思ひそしる

津守国平

桜花ちる比はやよひの三吉野の山にしもなほ桜あるらし

前大僧正公澄

いくとせも我たつ杣に居しめて山のさかりの花をこそみる

院みこの宮と申ける時花折侍るとて枝
みくしけにいるとて後夫たちにまいる
内裏にて春の比七仏薬師の法をおこなはれ
侍ける時思ひいてゝつかはしける

前大僧正源恵

春の宮にいりしまゝに幾年をへて今は雲井のなみたをそみる

正安三年の春桜の枝につけて内裏へ奉し

詠ける
良助法親王
九重に多くをかさねてにほふらし花もことしそ代にあひつゝ
詠し
今上御製
今日みる花の人々もおなしくて春のかけしろむものつゝさ
弘安三年三月日吉社にもうてし御幸給ける
天台座主にてよみ給ける
前大僧正公豪
年々の御幸をまつる春なれはたえてや山も嘆はて
春の寺中に
源兼朝
雨ふれと花みし人をかへれは花の年の春へ経る

花の咲ときく詠ける人のもとにいひつかはしける
衛門上人
今よりは人のとくにも思はれよ世の人も出てなむ花のおりて大
道助法親王の家に八重桜おもしろく咲けるを
西園寺入道前太政大臣
勅なれは又かさなれる宿にもなほ匂ふ八重の桜木
入道二品親王道助
桜花おもしろき人の宿よりへいくへつもるとも春のつらね
紀淑氏
さけいかにちるも我のみねをむすふの名にかけれ

前右兵衛督範藤

咲花のいろしもの色をこゝにみてそれ程の春風ぞふく

澄覚法親王

此春も又ちる花をさそふらしおしつる身の花ぞあまりて

弁内侍

なからへていけらハ後の春ごとに移れ色よ花もちかはる

祝部国長

人こハぬ宿の桜のいろしく風もいとはくハ去りて絶え

僧正範兼

咲なりし花よ雲の外人にてふにつゝさの春風ぞふく

平時村朝臣

雨ちらし雲のへたての山風よ吹くなりや花のちるらん

平貞時朝臣

水上や花の木陰をなかれくる桜をさそふ春の河なみ

中原祐春

ちりやらぬ花の人をまれにこそわかしもわかるにさそひ給

法印雲雅

散ぬれハ雨くも梢のさひしさに風よや花を思ひいつらん

中務卿宗尊親王家の歌合に

源時清

消よう文やしけりる春の月うるいかるやもしの香りて

春の哥の中に　　前関白太政大臣

めくりあふ春ハ五十のむつ毎にしつて霞のおほ(か)月のかけ

春の此月餘をも行く思ひけるを嘆ける

法印維海

かすむらん今行つての春の月くもれいのるよふいとも有らん

山階入道左大臣家十首哥に田家水

源兼氏朝臣

尚代の春の門田にもる水の道あるさけにもれぬや絶えぬ

題しらす

平宣時朝臣

うちむれていふなりつるゝよるハ人ありけるに花の夜かな

前関白太政大臣

忘れめや春日の野への里すみし昔か宿の若菜の波

前大僧正行尊

春日山まかるとて若宮の社に奉りし時春にあへるさまに

うつろはむ花さへこそいかにしく春ならん

ける人のもとに二月につかはしける

中原師尚朝臣

花さへこそ数々人を待つしにありやなく春の花にかへるかな

二月に同月のあつまりける年よめる

前京亮房綱

萩のころ後のやよひのやへ桜かさなる春の花ごころみれ
用しところにあまりの日よみなりける

天台座主道玄

なれよく行わりわれ名残のなかなる春の別なりけり

述懐の心を　　賀茂経久

秋山よりの名をとりけり二条草三のくるみ給をとめけれ
祖父忠久検非違使まく条〳〵にうつしける事
と思ひて賀茂の社によみてたてまつりける

惟宗忠宗

うけてわたるまじく芭蕉かさなる江は秋もさびし

題しらず　　大江貞重

絡事をもさりはなれて附島なくへつる跡もしれぬなみを

よみ人しらず

佗人の心はなれて行くすゑにかやすく秋はなからむ

権大僧都覚也

有明の月まちて行く名にしられぬ秋のかごとよをそき

平時直

みしのよも棹移しして行く末の福寿も光の後の秋きを

賀茂重久

年をへて我林山の行しくらすゆし初音を今も聞のみ

云亮の行しゆけるけ行しくすると聞て

西行法師

郭公人よりさきにきゝつらむ初音をきゝてこそ人ま待れ

羇中郭公

平時茂

鳴くまゝ雨はれくもれて過しくらすこゆる山路の末もいらず

夏の夜の雨中に

光俊朝臣

いつゆくの夜さきのむらしくすると思へは待も待こそ夏なる

雅成親王

夏の夜のあはれを知て吹まつの夜はのあはれにあまくる里

菖蒲を

中務卿宗尊親王

いつまてのあやめのもとに袖を濡も上てね袖ぬれけん

前中納言資宗

かすみして

へ(?)我にいりけりける梅をとり

今も又さ月ふらけるあやめる昔の香をね雨に上て見

遊て

前中納言資宗

家の風のかしらにこよに待まてむらしの花よ身ふからむ

歌しける

観意法師

氷ゆく池の川ならす梅の末もさよくはね又月雨の比

大江茂重

さえくらしのよる小雲のかくともみすむやら又月の比
源季茂
風わたるわしの末葉よりそゝく露の雨みてこそ小笹原
笹わけしみさく蝉のなくしけりなりけること
平親清女妹
夏しらぬ夕まくれまで秋を思ひつゝ木末の笹によるへてもなき
題しらず
平親清女
我はたゞ思ひのきてぞいふ木末の蝉にわかれもたく（かな）
蝉をよみ侍ける
前参議忠定
思ふまゝなるゝはやうらむ蝉のなかくなきけり夕暮の空
夕蝉を
津守国助
いふ文字もやうつらむ白露よ月まち出る夕かけのむ
題しらず
藤原朝宗
風のそよ吹そへぬ草の葉にうつ蝉のなはなきける
覚人法師
ちらぬやまつはつもきもかれや蝉さすもりの梢に遠く
式乾門院御匣
色かはるねしつの袖を思ひねの涙をはのこと庭の松風
寄風述懐といふ事を
雅成親王

春の月のかへる所にうちかすみけれ北野をも山をも旅風ぞ吹

旅哥の中に　　前権僧正通（道）海

此すゑはなき春も来もわかつ野の道のたよりをとふ旅人

弘長元年百首哥奉りける時春

前大納言為家

よなよなの涙しなくはなけ衣旅をしく春の袖はみえまし

題しらす　　前僧正公朝

我袖のぬるゝにみてもおもふらむおいて春けき露の下草

前右兵衛督基氏

今は世にあれのみ秋をと思ひくらさなけれはむかし二條小

惟宗忠景

今そうきもとの心はわすれにきたか枕の露そ今もかはらす

権中納言公雄

なみわかのむかしのたとへのつらさしるそも今もかはらぬ露も春つゝ

前大僧正實慈

年をへてまつもかひなき涙のかはりかゝるうきよの旅のゆくゑ

藤原秀ち

関のとをさしても通やつくしとさ逢坂山のわかれなるらん

弘安元年百首哥奉りし時

入道二品親王性助

雨もろこそねは宿もよわくれく山寺のかゝる雨しかに何弟

松の寺中将　法印宗意

すみなれし月はむかしの松風にたてさひしき庭のあさちふ

後九条内大臣

我なからいはぬを涙のもらしそへて身の秋さへそ月をみるかな

入道前関白太政大臣

いかなれはやとる袖のしほるらんうきもわすれぬ山のはの月

殷富門院大輔

なさけをや涙のかゝる袖にしもやとりてすめる月やしるらん

光俊朝臣

思ふ事けはなくてさやける月なくは岩の秋は松一なさぬし

源季広

身のうきのわかるゝ月の影なくは松の人はなくさみなまし

津守国平

松ふへくなれや月のますかゝみ鏡山ともれは光の影をみるかな

法印良守

雨のしへて今はくもりの月をうつしくも松はなかくはすむ哉

常磐井入道前太政大臣

さらりするやとのうけつゝのうちの松を待えてみにし月
けけ

月のよむしらむを思ひ出てくらしよるをまちくれける

人のもとよりかりける

弁内侍

忘れすよ思ひや出る雲のうへにみしよの旅の月影

文永文年九月十三夜白河殿にて人々よみ侍けるに

水邊月　後嵯峨院御製

秋の色や霜もかはらんあすか川かはらぬ月の八十あまり

題しらす　よみ人しらす

大寺のなにとうらをとの浦なみのかうふとすめる旅のよの月

入道二品親王性助

入相くも月みれはこそうかれぬる旅のあきの山里

川舟のくたりてのほる遠かる命をしらてもくの旅の有明の月

静仁法親王

順徳院御製

旅の日のあかしをとくぬるもろこしの松のけふかくるらん

讀人不知故頃為家卿典侍親子

典侍親子

都人見はやとこそ思ふなれもろこしの松のこれをの旅の衣を

従實朝臣

きのふまてよしあしのかりねにうつりぬるすみかの旅の山里

里揚衣を　平親春

旅衣くらはかゝるに衣うつ里の里やよそにむすふ道

旅の歌中に

入道二品親王性助

我宿ハわすれしのまゝに絶はてゝ家も旅寝もかはらねの雨そき

文永六年九月十三夜白河殿の五首歌合に

山紅葉

後嵯峨院御製

そめてより袖もしくれて秋てすみ染の夕ひかまけし山の紅葉く

題しらす

権中納言為雄

よそのこすゑの涙の我袖に移りてくもる時雨なるか

前権僧正教範

年をへてくもりやはてん月にいまをなくさむ袖の露よりもる

大江宗秀

よそにみし根の雲のいつのまに我里かけて時雨きぬらん

秋无月の比歌合のまけわさしけるに

法皇御幸なりけるに紅葉の舟にいまそめつゝ

哥とてよみ侍りける

藤原為道朝臣

紅葉ちるのみやこの舟こそよそにこゝろをこめてつゝもしるらん

冬歌の中に

宗恵法師

吹おろすまゝのしもるゝ下もとのもみちにしをれ谷の道

藤原親範

冬川の岩の色をも氷の下にしのこす紅葉なかれ

前大僧正忠源

うらやましやすく身ハ思ひこしも身をすてゝ世をもすてけり

百首哥奉りし時よめる　前大納言為世

和哥の浦や五代のあとに濱千鳥七十ちあまりかきをしもすむ
三十あまり三かへりしらて浦の濱千鳥

慶運

我世にハあはしかわかのうら千鳥跡をもやたかに残さん

入道前太政大臣

浦千鳥なれハのよしのまかよしも秋の波にハ秋なる秋る

中務卿宗尊親王家の哥合に千鳥

前僧正公朝

家にしも光のとよきのさよにあかる月にそ見ゆる霜

いまこそ霜とゆるされけるに時雨の後降ける日
清涼殿にさふらひをうけける

従三位親子

いかなれハむかしのよにハちかつかて庭にのこれる雪をみるらん

返し　よみ人しらす

へたつるも庭にハむかしの雲ゐの雪もみえける

前中納言定家卿やうすきを降ける所にて前大
納言為家にしのひかに降ける時雨のあしたに

守りかりける　　権中納言公雄

きてもきて年をかさぬるよ今も世にありてあはれな君の白雪

如し　　前大納言為家

消のこる跡にて人よこりけしも猶あとをならす庭の白雪

野外雪を　　按察使實泰

すゑきけるほとはのこる春日野のおとしろの名は雪ならく也

山家雪といふ事をよみける　　如刑法師

春は雨にこれしめとしづかなる雪なはけゐ身こそいはゞ憐

訖しける　　光資朝臣

今さらよなにこの雪のうはしもと我身世にふる道は跡なき

法眼慶融

降りける雪にいまさらに我身世にふりはてぬとにはなる時

藤原信鄕下

冬されば庭のをしもすゑしく炭竈の烟におはしる峰のうへかな

中務卿宗尊親王家の百首歌に　　小督

あすよりは世のなりゆくを思ふにもおしからぬ年の暮なく

弘安三年百首歌たてまつりし時

左近門入道円入長

何となくくるしかりしをいかにして君に逢ひては身こそ忘るれ

百首歌よませ侍りし時歳暮

藤原為相朝臣

我身世にふることもなきわか年なれは逢けく暮といつの我やうき

読人しらす

よみ人しらす

積りなくいかなる年もこゆるこのいつくとも我なる

年の暮に

新後撰和歌集巻第十八

雑歌中

かはらの家にて秋の夜ふけけるに月をみて

よみ侍りける　　権中納言俊忠

なかめける人のよもしらすかつらの里にすめる月影

月の歌の中に　　基俊

をもはくも空より出てゝ中のに秋のうきまの三つ有明の月

弘安元年百首歌よませ侍りし時

二条清親王元助

いつのまに我とならにしわか身ならて袖にやとれる月をみるへき

題しらす　　　入道二品親王性助

思ひやれさてもやつるゝ苔の袖わかつゝみつる露のしけさを

正安元年九月の比夜坐あまた所にて法花經供養し侍し時三七日の懺悔によりてよめるをかへりつるあしたに名ある所より申し侍ける人の返事に

法印憲基

あはれさにいる暁ふかきの鐘のをとも一よりかはるものとやはしる

題しらす　　　式乾門院御匣

いりまてに関にいりきてもなほしらさりし紫の暁のそら
百よりよりも侍ける暁

法皇御製

さりともとたのむ紫雲の暁のそらにはしめて鳥の声々

閑庭松といふことをよませ給うける

今上天皇

かくしつゝ千とせを待つる松の枝の嵐しつかにすめる山里

遊義門院

後世ねかふ山家の心を

世のわさにかゝはらぬ身の山の宿とのいりまて嫁しわつかなる庵

那智山にて日ことにかくお行ひけるあまりによみ侍ける

前大僧正道瑜

三年へしおなしの山のにはたはらのくさ庵のまくらに流

題しらす　　　読人しらす

山かけやいはほの清水汲てしる死すまて身くても三年へはや

月しくまをこちなしける人のかしこまりける

蓮生法師

わけかねのくさの秋のすゑにはうすくとも氷しける山の谷川の水

宝治百首歌よませける時山家氷

前大納言為氏

すむ人は又ありかほにこそ見え山里は覚の水の有まてのこと

山家の心を

式乾門院御匣

寺門のちかき草の庵の雨ならてとふ人あらはあはれならまし

土御門院御製

世のうさを身にしる時そ山里は松のはしらもたのもしきかな

後鳥羽院御製

さひしさも浮世にかへし山住の夕日すゝしき庭の松風

天台座主道玄無動寺にすみ侍ける比世川

よみける

前大納言為氏

きて見よといひし人のあとゝはし昔のあれし家の松風

返し

天台座主道玄

こしかたやむかしの跡のしのふらん我もすみてし庭の松風

題しらず　　よみ人しらず

松風の音をきゝてや山里をうき世の外と人はいふらん

津守国助

こりしなましの衣をかさねてもわすれさりける峯の嵐を

藤原盛徳

濱人不知也往那名字遺家盛徳

すみなれは之ゆへくさあとをつくるなき果てし峯の白くも

前大納言為家

住すめし社なりとは思ふとも山はいつくにかむの月をうくるま

百首歌奉りし時山家

天台座主慈玄

山里は世をいとひこし思ひには住うかりける人もなきかな

題しらず

平泰時朝臣

思ふには事しくる山路もありと人の跡に何か分けいるらん

前大僧正實伊

さりとても我は世のうきことも聞こえすはいかふかゝらん山の奥か

よみ人しらず

世のうきをなけく人のためにや山のおくにもすみそめけん

九条左大臣女

思ひ入よしのゝ奥もいつまてかうき世のほかの山路なるらん

従三位基輔

世をいとふしるしもいかならむ月のすみける心を山の奥に

仁安元年百首哥よみし時

二品法親王覚助

契あらハ又やめぐりあはんよし野山房にをりハすみ給

山家の心を

形意上人

今ハよしうき世のさかしと思ひそめハ又しも山に宿ハかさじを

賀茂在藤朝臣

うき世の闇にさまよひ山かげを語らひて身をかくさばや

百首哥よみし時人々を

藤原為信朝臣

さりともと思ふ心の山里に立とまりてハすむ人もなし

題しらず

仙円法師

世をいとふ山のおくにすまばやと我身よりほかの人ぞ恋しき

前大納言実家

住わびてまた住まぬ山里のさびしさを人のこゝろにもがな

式乾門院御匣

里ちかき宿の下葉の夕風にかはる木のはや

法印最信

山里にすむ人の心ぞ宿の名残ぞ

守覚法親王家五十首哥に

三條入道内大臣

思ひ出る人ハあらしとも別れの岸にかゝりける名を尋ん
きゝしらせ

惟康親王家右馬權

世よりける通ひ馴れつる山人のいまはの後ハ志をつゝ尋
よみてつかはしける歌を前中納言定家卿
許よりかへしはしてつゝみの上に書付ける

藤原基政

なき跡の人は残もいはぬをいひつゝ今の跡はわれこそ
欽意法師續拾遺集えらふ人の尋入てよみ侍ける時
申入侍りける

津守國助

思ひのみうつゆく道のすゑにさりともそれのみつる哉
ぬらし

欽意法師

なくもおもふもあらぬを舟入しかはさりとも跡を後のなこり
弘安元年百首歌奉りし時

入道前太政大臣

あし原の跡とりかはせむとしつゝ志てもかたのむつの流
にかゝめしのぶ為世の歌儀を定家卿に尋て奏し
侍ける

前大納言為氏

行のぼりて計してなむかゝる跡の露のかゝらぬ思ひね袖に残る身

よみし

法皇御製

和哥の浦に子を思ふとて鳴鶴の声ハ雲ゐに今そ聞ゆる

題しらす　前大納言為家

たらちねのおやのいさめの枝しけミ思ひわくれハ枝そのこれる

丹波忠有朝臣

つたへこし窓にともなふ教のいさめにのこる家の風

弘長三年内裏百首哥に窓竹

前大納言良教

いつまても家に年へし笛竹の世のよろつ代まてと契りける哉

述懐の心をよみ侍る　豊原政秋

家の風吹つたへこし笛竹の代々にたえせぬ名こそをしけれ

源有長朝臣

風さわくあらき流にかよふこの前大僧正慈鎮に申かはして後によみ侍りける

前右近大将頼朝

逢みてし後ハいとこの海よりもあまりや人をおもひしるらん

返し

前大僧正慈鎮

君の心まことにいつの海よりも深くおもひそ

題しらす

入道二品親王性助

きてやとて流れよふかき川の水とまる心の末そかなしき

内大臣

よし野山高き梢のけふ昔かくてねかふ我の心よ何のことそ

藤原嗣房朝臣

いさ再しのからきこゝろのふかき心に思ひしるさはいはむ事をも給ふ

一夜のあさきをちきりておもひける此人のおもしろけり

前内大臣実

のかへしね絶の紙かけるそて絶このせ世をおもふ人をとふ

けることしてもむかしにまかせける此人の言ふ

あはれてかけるぬるに

民部卿資宣

うき身にはえて我まく末の松こゆる波をもえねにもるらむ

述懐哥の中に

前大納言為良

玉鉾乃みちある此代の法のことしに思ひしつゝ頼むはかなさ

除目のあした尚侍藤原現子もとより給はせける

今上天皇

そのうへにおもひしのこすことはあらし昔の代まてしのはれそする

返し

尚侍藤原現子朝臣

契りこし人のまことをあらはしてかはらぬ君の代をしらせなん

今宵猶おもひそへてかけける此人のよろこひまちけるぬまかはしてかけける

前大納言経任

ちゝさらき一番椎のつくし年毎て空のうきよのへしさい

題しらず

源兼泰

くるとのく猶うき恥は数有て我身老ゆく松の古縄

藤原基孝

身にしみてのちのよかきりつらねけむ世をうき思ひはなきしもわかなる神は

前関白太政大臣

思ひしもたゞ秋よりくる世の中の哀をいつるけりかなしかりける

賀茂久世

しらすこそ思ひ身よりくるかなへ身をもうき我てハ猶なけくハ

源師光

さてこそもしらかるゝ世にも捨むかつくゝ猶いとゆく我身と

惟宗忠宗

中々にうきもいとゝもすてゝ老のまゝに世をやすらふ

中務卿宗尊親王家の百首歌に

左近中将具氏

これのみぞ我のしるしの思ひに身にかゝるかなしき身のおもふはれそ

題しらず

式乾門院御匣

人のうき世をもうらみしくてはうきの身にのみ身はつらき姉ハ

平久時

うしといふも身人のうきのみなしにもやゝをとつらね人ハおもひ

権僧正公源

よしさらはわれたのみてもあらしとも思ふならはうき世なりとは

行生法師

なからへてうきをいのちのたのみにてうきをしらぬやひとのよのほと

前大納言實家

うしとても身にはそはれつかくてのみこの世さりとは心のはなれかね

天台座主道玄

行末のなほのこりしもあらはこそうき身の程は思ひしらるれ

平時茂

なからへはうき事や猶数そはん昔も今もおなしこの世を

法印円勇

世中に猶すてかねつ身なれとも捨てしは命をさのみこそ思へ

円道法師

行末もさこそと思へはあはれのみなほさきにたつ我身なりけり

前右兵衛督基氏

とにかくに我身のなくさめのなき程はうき世をそ今はなけかす

道法法師

世中をうしといひてもなけかれぬ身のつらさをそ思ひしりぬる

法印定意

うき事を思ひつゝけて秋やはと思ふも秋のなれるなりけり

前参議経清

いにしへもかはらぬ宿はみし人ものこる花の梢そ袖はぬれまさる

平時広

めくみの三代にあへる我身まて花の身まて袖さへひとつぬれぬもしる

前治部卿實任

ちりなくも我かくしのいまはこの世にまかきかし(?)花のなるへし

弘安元年百首哥奉し時

前右兵衛督為教

みくもりも我(又)よしもなき似ぬ面影や花を春との鏡ならん

題しらす

鴨長明

いたつらに鏡のかけはうつれとも昔のこともなかりけるよ

前大納言忠良

わくらはに世のうき事をいひよりてわか心のこともやすくなりなん

平時元

にほの江のあし間にやとる月みれはけにすみのほる世をおもひきる

平親世人々に歌よみとはけるによみて
つかはしける

天台座主道玄

道のへに茂るむくらの一本も心にかゝる世をわすれては

述懐の心を

後久我太政大臣

人しらぬいはねの松の年ふりて人こそしらね我はもとの世

平宗宣

捨かねの心のほとは今もなほうき世をいとふ人の身に

藤原為信朝臣

あらましに思ひしまゝの世のうさも身の数ならは猶やさまし

弘安元年百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

なからへていつまてうきをしのふとも我よりさきの身のゆく末

題しらす

大江忠成朝臣女

何事に志りてうき身のことわりを思ひなくさむ心なりけん

中臣祐世

世をうしと何なけくらん身の憂を人の身まても思ひさりける

平時村朝臣

世中のうさにはなれて住身とも人の心にしたひかねつゝ

院大納言典侍

こゝろよ思ひしまゝの世は我かつらくあるをやはする

高階宗成朝臣

あはれとてしる人もなき浮世には何かすてぬ人をうらみん

丹陽門院井忠

人のうさを思ひいしも思ひやる歌へうき身の心にそしる

法眼能円

世の人の教すもわかくハいつのまにうきにしれたる心の我ねカハ

前主殿頭有
参議雅経

いしりかてぬるの後ハ父まつかへて世をまうしなや
の母ハ

従二位行家

いけの秋の心のさかしるいはへもやしきぬしのきえる上

按察使資平

あハ秋あしあをうきぬしいしらて移すてやるねへるる返

金判盛久

うしくつるしいつよるねへこうる世よ月をいおしこめ紀

良心法師

うき世してうらしきそてもいつもえわすれ所てたらを

静仁法親王

世中をうしこいえくもひふるうしの我わ月の人いさよ
つまこ

殷富門院大輔

まいしもの わもにさめるてみをいるとあいこすく紀

按察使為家

わハ我いけりのわし所の限まうしきて又いつて浮世かな

平附常

いつとえいしふさも移世の中をなけしへのあしお月さらハ

道法法師

いにしへも和歌の浦わに道ぞある世にあらはれてこそ見えけれ

心海上人

命をばいのちある人のをしむらんわれはいのちの身をすてつゝ

守覚法親王家の五十首歌に述懐

寂蓮法師

うしとのみいとふこの世を家を出し身のうへにてや身を思ふらん

題しらず

法印宗喬

ちる花も思ひすてにし月も世にありし名残にかなしかりけり

世をのがれて後百首歌よみ侍ける中に

前僧正道性

消えぬべき露をとゞめて捨し身はまたいたづらにのこる身の世は

百首歌よみし時述懐

内大臣

いにしへし世々のむかしの名残こそのこる身には月もやどらじ

同じ心を

前大納言実家

いはね関の藤川世をせきかへし流れてもなほ世をすみわびて

小倉の山庵思ひの外にまかりいでてすみ侍

りける時よみ侍りける

権中納言公雄

世をすてて思ひをぐらの山住のいほりにこそ見るはする身なりけれ

そのころ殊更人々に仰つけて院中にける人
のみ申すに
山水にうつれる影をやとしてもにごれる世こそ南に志うる紀
詠しらす　　後嵯峨院御製
道ある世にいのしも思ふもありけるを身まつこそすらね
普光園入道前関白左大臣
しらするる世のしかつよい思ふこも民のちりしるを身まをやすまる
百首よめる歌しけるに述懐
今上天皇
都しても思ひみるこそ絶ぬけく世中よみたらし人に
こそれ老そん

新後拾遺和歌集巻第十九

雑歌下

題しらす　　　前関白左大臣

こ我すし道よりいくつのあくとせをへてもかはらぬこゝろなりせは

嘉元元年百首哥たてまつりける時　　　前大納言為家

昔みしこゝろの友もなきみのをとこ山の松の古木も

ひろさはの池に雨のふるくよをかけける

　　　　天台座主道玄

たえくみる我のけのなやかてさえて昔みつれの影うつる小池

題しらす　　　前大僧正源恵

思ひ出のうち出つる人もなしいはしかへりていかにすへきを

かくて又うき身のそのいつもなきかと思ひてとは

よみ人しらす

源兼氏朝臣

立かへり又いつしかへるとも人やちにかすのとしふとも

平政村

涼しみなれしをおもふしつのわかすゝてぬれし袖に

津守国助

いやしきもよるとさるのの色をおもひて立しる昔人かな

藤原忠能

年月のへつゝ留まりにしるしつゝこの身こそ我はまた待つ世よ

前大納言基良女

思ひ出もなきわか身の人そ世なくさるゝとやかてそ人そうらめ

平行氏

人はいさ立つのをこそやすらのこそ心のしこの思ひはいかに

法眼行済よみ侍りける熊野十二首の歌の

中に

前大僧正禅助

世よつらき身をしらぬと思ふしける山まて立つゝ昔をしのはせ

懐旧の心を

藤原忠資朝臣

そのしのひへは年に立つこゝは我身よりも昔恋しき

よみ人しらす

かへるく我身よりも昔をも人今さては誰の声のをん

弘安元年百首歌奉りし時

前参議雅有

田しるまねうつなのしよみなる夜は思ひいれしまた昔なれ

題しらす

よみ人しらす

あきなれまみし世たのつるふる夜の衣にしのはるゝ昔かな

法眼慶融

みをしるをなき人の床に我しのをはきの枕ならふ夜もうらしき

源通有朝臣

我のみやつま梅のよるはことに袂にも昔を恋しつゝ思ひ出すらん

後一条入道前関白左大臣

我思ひてなつかしき梅のわつかにのこる昔の月をとふらん

前右衛門督基氏

いにしへにくらへてハ袖みえつる今夜の月にしのはるゝとハ

此格僧にくりつもる二間に侍けるしを出

ひとくよみはるゝ　前大僧正禅助

天の下に世にやらくさいのこるよはれ昔にかへる雨気

懐旧の心を　よみ人しらす

思はしかく思ひもつのる世をすくしたのみしるしもうしなへる世と

高階基政朝臣

いつかれハ過にし思ひハいにしへの月日まさつゝ遠情のかな

出家ましてよめる　惟宗盛長

年月ハいとゝ人つま思ひにし此世を今そ忍ひしえぬる

世をうしとて後人のなしけれ我もくはける返

事に　三條入道内大臣

今さらに袖の色を思ひやるらん身をしれもうめし人の名残も

前大納言為氏のし飛井やしぬるよしをきゝてつ

かはしける　権中納言公雄

身をと捨し我すみかめハなきをの我てよにはとまらぬ袖の名か

返し　　　　　　前大納言為氏

身よりへつよなけれとも思ひたちけるすみそめの袖

平貞時朝臣かしらおろし侍けるよし宣時朝臣

申しおくりて家のなけきて申しつかはしける

　　　　　　前大納言為世

世をすてゝ入るこのみちを祈歎くには我もよにふかく思ひしる

返し　　　　　　平宣時朝臣

年たけぬ人もまつらむ世中にそむいて我あらぬのちの道

読しらす　　　よみ人しらす

何ことをまつ身をうきとなけきけむいとふる世をハすてもはてゝし

　　　　　　藤原景綱

秋やよみちのしるへ暮ぬといのちをしらぬ老の身を

　　　　　法眼源承

いかにせん此世のうきをさめてはまた後の世のことをこそ思へ

源親長朝臣東国のかたにまかりける時こはまかりて

よし見て源邦長朝臣にいひつかはしける

　　　　　　後光明峯寺前摂政左大臣

うきの世ハまよふこゝろのうさもしらすにかはる別なりけり

返し　　　　　　源邦長朝臣

みし人の捨て出にし後の世にこゝろをかはすことのはもなき

平親清女身まかりて後はかなきこの許に申つかはし

ける　　　典侍親子朝臣

よそにても人はみしかと後の世を我のみとはむ歌くやしき

返し　　　藤原為道朝臣

あさち野や風にみたるゝ露をよそにみてきてし我もきえぬを

道助法親王かくれ侍りける比僧正道憲もとへ申

つかはしける　　行家法師

思ひ入る山の奥の苔の袖のうへにほすこともなし

性助法親王かくれ侍りて後法眼行済もとに

つかはしける　　道洪法師

人よりもさきたつ人は先に立つ我こそ先の下にみえまし

返し　　　典侍光子

哀てふ我身にそ寄る鳥辺野の煙をよそにいつかみむ

藤原為氏忠

さく秋しも思ふやる人の為よりもやみちの知しるし

少将内侍身まかりて後仏事のつゐてに弁

内侍人々すゝめて歌よませ侍けるうたの中に

土御門入道内大臣

語そ思ふ人へこそはしを鳥辺の浦ちかき枕や帰らん

同行の方西のかたになりけるに西のかたへ
性瑜上人

思ひきやこの煩ひくるしさに今こそ法をとく人にかは

後世の事申しける人に
衣笠内大臣

ゆくさきの西へいかにもいりぬべし岩さへもとくも人に教へてくる

同法尼をはなれて法をとくまつるよし教へてなけ
かきまつりける人なけきをやまいまはつれて
うけぬ調しくいのりけるつみをまつる
付けける
法印経勝

いきてこそわかれしもわかれしもせめてなほいつまてかは

前関白太政大臣なけくまかりける法樹つく
申しつかはしける
前大納言為氏

こゝろしてきつゆかるも思ひ入そえてなけきこしもと

返し
前関白太政大臣

これやなけきけるよりうきつわるる人をみる法をとて

僧正道順

業く申しいふ人のなのるもいりたにもつる道ときけとも
大宮院かくれさせ給ひて後ある野山にておこなひ
侍りけるによみ給ひける

貞空上人

兄も又秋つまてわつきてやなる無也ふの鏡をとしもとぬらん

返し　平行氏

川にたゞりを谿の別れしくうる世にくらへつゝもは

藤原秀能

おもひしもさらぬ人の命にしうるは此世の別なりけり

素暹法師もとにつかはしけるの限りに関して侍る

秋比申しける　中務卿宗尊親王

限りなきそのあはれにそわかる世の別れはさてもさらぬ秋こそ

返し

素暹法師

かくりしる別れもとつてわかる世の中にいか何思ひけん

普光園入道前関白のもとに秋の比よみ侍ける

天台座主道玄

あきらめのわかれしその世に長らへて思ひもしのひなまし

返し

法印覚寛

逢坂の関よりかへてとまりしすみたれもつまりならさ

後京極摂政かくれて秋はてけるかくる日従二位家隆

ふかくて秋は　前中納言定家

此の春くつくも秋のよし桜花一夜の夢の空のみの跡

返し

従二位家隆

ゆふされのきりのまかきにはれやらて花ともみえぬ山の山風

後嵯峨院かくれさせ給ひける年山里の秋をみて

従三位氏久

さもこそは山かくれなる秋の花なれあらし世をもすてゝねなき

思ひしに老の山よりも花よりもへつる世そ後朝臣許

見りける

平親世

すみ染よきのねもりけるし山桜花はみけるきのなのゆふへ

郁芳門院かくれさせ給ひて又の年の坂本の前の

萩をみて

大蔵卿行宗

萩の花みるへしとやはおもひけんうつろひし秋の露もきえなん

題しらず

よみ人しらず

みる花はなけきの雨にしをれつゝ萩の花かつちるに行なり

坂の比同明石なるみまく後一条入道前関白の事

を思ひいでて詠侍るなる　後光明照院前摂政左大臣

かくやすらひぬる世の人もありし我世の後の坂のやま里

九条内大臣身まかりて後の坂本の墓所にて

よみて詠侍ける　前大僧正慈鎮

山里は袖のみだれなくてもなく昔をたへにいふ坂の本のさくら

題しらず

平時高

きてぬまともみつかりゆくなるへの昔の跡はいけるとしも白雪

京極院の十三年に一品經くはられて世尊の中よりか
はりして　前関白左大臣
此世にて人をいつくわくいさむるの風は法の声入て我身すゝめ
後嵯峨院御時のこゝろ継し〔ゑ〕めくよりとも
顕けるう　法皇御製
大井川ゆく瀬の波も御しくは昔にかへるまことの影をとめん
法一條論子のおもひに侍ける比よみ侍ける　後一条入道前関白左大臣
ものおもふときこそかくるゝみえね〔ぬ〕かくさめて身よりの残る涙ふかき
津守国平身罷りて後よめる

津守国助
有世にもかくやは人の面影の立もはなれぬ此ころかな
侍中納言公宗身罷りて後三月盡に山階入道左大臣の許へ申つかはしける
前大僧正良覚
うかりける春の別に思ふにも涙よくらすけふのなけさ
前参議為道朝臣身まかりて三年に結縁經供養し
侍けるに人々（沢）よみ侍ける菖蒲懐旧を
法印定為
かけくさに思ひやはせしあやめ草今年も（かはせの）別のつまをかけるは

東二条院のさぬき川流しける男君ゆかりけり
けるのちしのびてつかはしけるにかつらの絃の琵琶
をかへしけるを聞て　常盤井入道前太政大臣
まれなる月のかつらの面影を思ひおこくやたちかへる遙
返し
東二條院さぬき川流
ふるくなる涙もかれし今更に末の月を袖にやどさく
前大僧正隆弁八月十五夜身の上のあしくなりけるに
周忌に結縁経書きはべりて懐旧といふ事を
前大納言實冬
めぐりあふこよひの今夜の月みてやありし面影を思ひいづらん

安嘉門院にさぶらひしにまかりける九月十三夜
後京道信朝臣月みるよし申て侍けれは
前権僧正成範
今夜こそ涙の空はれて雲もなきをいかなる人の月をみるらん
平時茂家にありて君の身まかりける後ありしままの
月をみて読侍る　平行範
めぐりあふこよひや昔の恋しさも同じ都の月をみるらん
題しらず　中臣祐親
かきもはや我かけのみしよの旅なる月は袖にうつりぬるかな
法眼行済

忘れめや見しよの秋の月影を昔の雲のうへのまにみる

西園寺入道前太政大臣身まかりての次の年の秋常盤井入道前太政大臣家にて三首歌よみ侍けるに旧懐といふことを

山階入道左大臣

あはれげに年の三とせの秋の露さへもゆふぐれの空ぞかなしき

八月十五夜後一条入道前関白の事思ひ出てよみ侍ける

大蔵卿隆博

もろともに見し夜の秋の面影も忘れぬ月に残るころかな

従三位為継身まかりて後日数へて人のもとへとぶらひ侍ければ

安嘉門院大弐

今さらに思ひしるかな夢の世はきのふの秋の後の月日に

源時長朝臣身まかりて後翌三年の春むすこのもとに申つかはしける

源兼孝朝臣

別れにし後の三とせの春の月面影のみぞかはらざりける

後嵯峨院かくれさせ給ひける時素服給てよめる

中原師實朝臣

立かへる衣の色もかはりけり涙の袖はしろくなる墨染の月

性助法親王身まかりける時法眼行海の許

と申つかはしける　　前大納言為家

さとりける身のみちのへ(さ)にしられけるなくさめ

なり

法眼行済

なすし又おもふのおもしろうつゝは思ひもわかぬゆめのこゝちは

西行法師後世の事申しつかはしけれは

前大納言成通

おもふみのあまたありてもこの世のみしる人こそはこゝろへのわけける

なり

西行法師

おもふのまことなき世の中をなをさそふなるひとのなきなる

なし

藤原家隆

なにはかる人のかへもよそになりぬる世のなかにまよふ月のひかりは

少将内侍身まかりにける後いくほとありて

ありて信実朝臣のもとへつかはしける

弁内侍

くれ竹のよゝのひとよにたちかはりまたふしなれぬ世をいかゝせむ

なき人をかなしみてよみはへりける

蓮生法師

なき人にわかるゝ道を先たてゝなほのこる世のならひかなしき

京極院かくれさせ給ひての比

前太政大臣

まさしれハ雲ゐの庭の一門にもさく花をさへ御階の跡
ゆつられぬけるかけりしらすを聞て
中務卿宗尊親王家三河
しらなみの住の思ひしほにしらすなのうら浪やものからも
友のうらあはれ法師のかし門のありける
待賢門院堀川
この世みくつくれをしにける上ての上猶ひとなつくこそ哉
又月の比大殿へ行宗文の思ひありくおけるに
同かりけり
大納言師教
是引の上引しらすにふしこゝらひとつしるをおなしき程ハなるらん

前大納言為家身内かく後日数よつりし又
前大納言為氏なしは中門のありける
入道前太政大臣
又月あれ日数はようにてあつらも我ね問や袖ものかなしき
歎しゝ哉
如円法師
みつもかく家の命こゝにありてきえ我らも人の袖もかなしき
法印兼雅
そのあくときてむかしハ親くハ住もつゝき道芝も家
興信法師
何しらくるあ引し川の影も人かり昔の人ハ宿るうた

九条左大臣身まかりての比月くまなかりけるよ
人のもとへ申つかはしける

源兼氏朝臣

見し人はまよおもかけ残し命こそそくなく秋てありなくいつまてと

前大納言為家家にてよく侍く後懐旧の哥よみ
侍けるに

法眼慶融

みしちゝのこゝろね別の涙よりみしよとわすれすやる袖かな

我身いにしへのへたゝりけるも昔今はらふ人のなかき
これは寂蓮法師の哥とて侍る返挙の夢にみて
侍けるしるし

詠しらす　　よみ人しらす

昔のしるしにうけりとしれぬるを思けり

証に袖に露かゝる

新後撰和歌集巻第二十

賀歌

百首歌よませ給ける中に

後鳥羽院御製

亀の尾乃岩ねを落る白玉のかすかきりなき君か代の末

弘長元年百首歌たてまつりける時

常盤井入道前太政大臣

君のためし亀のお山の滝川とはよ代をかさねにすむ河の流れ

建仁二年五月御会に池上松風といふ事を

もしめくく詠とよませけるた

後京極摂政前太政大臣

川のへこし岩かつ流の池水に松の千代見てそ松風そ吹く

西園寺入道前太政大臣のもとへ松のみと送ける

石清水のつまして

大納言通方

みちをはく末ある随のこゝろに千歳ふる君か代にこそ松の末

返し

西園寺入道前太政大臣

君か為まつしたへける松はかはらぬ千年の松もゆゑそうつらう

題しらす

西行法師

君か世のくめしよ何を思ひ同しかとたゝ松の葉の数をかそふる

露おさ年齢にいふ事をよみ侍ける

松の花十かへりさける君か代になにをあらそふ鶴のよはひそ

基俊

子日の心を

大蔵卿行宗

二葉なる子日の小松ゆくすゑに花さく迄ハ君そみるへき

隆季卿

春日野の子日の松は引そへて千秋に神の秋てそ世をまもるへき君ハ

土御門院御製

春日野のもりねの松の君かためあらはれて千代のためしハみえける

題しらす

右近大将道平

春日山めくみもしける松の枝にさこそちとせへん水の流

正治百首哥合に

惟明親王

朝夕にあふ年の数を思しける松と竹とにかはらしとそ

建仁三年和哥所にて釈阿に九十賀給はせける時の屏風の哥に

後京極摂政前太政大臣

ちるハ鶴の鳴人時えて君か齢の月をみつるか

白河殿七百首哥に秋月

前大納言雅言

塩の山さしての磯の秋の月八千代すむへき影そみえける

祝の心をよみ侍ける

法皇御製

三笠山いのるくもらぬ月日もしもとの世にやめくらし

建保六年八月中秋夜池月久明といふ事

を講せられ侍けるに

前中納言定家

幾千世を神代よりへる山のみけるとも及はぬ池にすめる月影

西園寺入道前太政大臣

よゝの跡さやけき月の影ならでもかしこき御代にすめる池水

仁安元年八月十五夜月与夜久といへる心を

前太政大臣

君かためくもらぬ影にすむ月のさやかに千世の跡そみえける

前大納言経任

千年ともかきつくる御代のためしにや跡を残して月もすむらん

仁安三年九月十三夜人々に十首哥よませし

川のそはの月前祝

法皇御製

流さたえ御代の雲井にすむ月のあかてそ千年の跡そ久しき

御代をまもると祈りける

院御製

いく千世もかくこそはみめすむ月の影もくもらぬ跡の行末

五百番哥合に　皇太后宮大夫俊成女

咲まゝに君のみかへしけり末は墨小野の杖もとくの花

名所の歌よませ侍りける　正三位家衡

むかしの秋のいくその実の末の世までこの国の世々の秋風

題しらす

後一条入道前関白左大臣

万代の春にかけて関こえ来るむらさき藤の花も君のこゝろえ

文治六年女御入内屏風に

後京極摂政前太政大臣

君か代に逢ふ山路の白菊はいく千代秋の花を見すらん

前中納言定家家蔵の書にもしるして京極の家にうけつたへけるになりける

西園寺入道前太政大臣

あつめしき君か代ちゝのことの葉は三代のちにも兼て見るかな

ぬらし

前中納言定家

おもひの君こし君こしゆくらくは三代のこの世のことの葉を

平時範の亭歌の上席まて宮花祝といふ事をよみける

菅原京経

うつろはて万代までも山さくら花もときはの宿にさかまし

仁安元年百首歌よみ侍りける時

入道太政大臣

水上も末もはるけし大井河君か代ながき宿の流れは

寄鶴祝言といふ事を　　今上天皇

あしたつの雲井にのほるこゑまても千代をかねてもなれし君か世の友

弘安元年百首歌奉りけるついてに

法皇御製

草香江の入江のたつも諸声に千世や千よと君に鳴なり

嘉元百首歌合に　　寂蓮法師

浪の上に菜もしけらん人もかはらぬ二つの山に遊ふらんかし

法皇六十にみちませ給ひける年寿命経供養せら
れけるにめてに銀の杖をまゐらするとして

遊義門院

つく杖に六千とせもいのりしよりつみて年の坂のすゑそ久しき

弘安八年三月従一位貞子九十賀給はりける
時よみ侍りける　　照念院入道前関白太政大臣

年へたる老木の花も此春のみゆきに逢てよ世やさかえむ

前関白左大臣

九そちにあまりの八わかれても君かみゆきのゆるしも万代の春

東二条院七十にみちけるを祝ひける時よみ侍りける

今上天皇

百とせにちかき七十迄にあひぬるはことに我か世の春や経らん

院御製

いかはかりまつかひのある代(世)の始とて数かきりなきまつりけるかな

従一位貞子九十賀侍りける時よみ侍ける

入道前太政大臣

代々の跡にたちかへりける波よりも年のかすそふためしなるらむ

後鳥羽院御時大嘗会主基方丹波国の風俗よみ侍ける

津守経国

天の下のとけかるへし難波なるみつの嶋にみするあきの

寿永元年大嘗会悠紀秋楽号石山

前中納言兼光

秋代よりわたる岡しもの声たかくちとせの山の椋をそうこころ

寛元四年悠紀風俗号三秋山

民部卿経光

玉椿かはらぬ色を八千代にてみつきの山そときはなるへき

正安三年悠紀風俗秋楽号三秋山

前中納言兼仲

椋こそ三秋の山にゆふかけていのるこゝろのちとせやきみのへん

右此巻依懇望書写一校了

延宝第八三月十一日

[illegible]